

41522

教科書文庫

4
810
41-A33
20006 38640

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

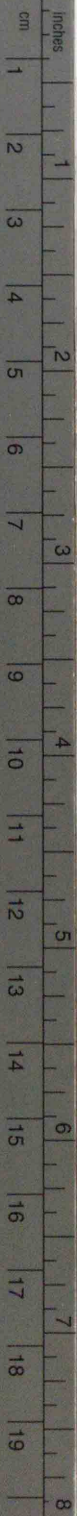


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
lg1
資料室



純正國語讀本
五十年來の歩
新刊版
巻二

見方
南
直



資料室

37019
Iq1

用科文漢語國校學中 日一十二月二年八和昭
用科語國校學業實 日一月九年八和昭

濟定檢省部文

文學部編輯部編

純正國語讀本



教育部審定



(照參 帝大治明神ノ現 一)

(筆秋長田彌) 所問學御帝大治明

明治大帝御學問所

明治維新の大業が成つて、久しく鎮されておたわが國の門戸が諸外國に向つて開かれて以來、わが社會には急劇な變動が起り、國民の思想が甚だしい混亂に陥つた。明治天皇には、深くこの情態に御憂念あらせられ、明治二十三年十月三十日、教育勅語を下して、國民道徳の大本を御示し遊ばされた。初め、高等師範學校に行幸の上、文部大臣を召して下賜めらせられたる御豫定であつたが、御不例のためお取止めとなり、總理大臣山縣有朋、文部大臣芳川顯正の兩人を宮中に召させられ、畏くも御假床中より右の勅語を賜はつたのである。

圖は大帝の御學問所で、御座下の人物は、前が山縣有朋、後ろは芳川顯正、御下賜の教育勅語を捧持して、御座所より退出する所である。

純正國語讀本卷二

目次

一	現つ神明治大帝…その一	一
二	現つ神明治大帝…その二	七
三	現つ神明治大帝…その三	二六
四	胸を刻む國旗の上下	三三
五	おれの秋	三六
六	愛犬ポチ	三三
七	動物の天國	四二
八	趣味の武藏野	四七
九	三種の計略	五五

一 狡狐虎威を假る……………戦國策……………五

二 小説家婢女を縊らんとす……………菊池三溪……………五

三 矢丸礮聲怯を勇となす……………大槻磐溪……………六

一〇 月……………柳澤健……………六

一一 元七黒七鳥……………齒

一二 向上……………七

一 得益の二事……………佐久間象山……………七

二 自 贊……………佐久間象山……………七

三 航空仙……………白樂天……………七

一三 一つの願ひ……………濱田廣介……………七

一四 落錢を拾ふ樂しみ……………薄田泣菫……………八

一五 冬の雪國…その一……………九〇

一六 冬の雪國…その二……………五

一七 旅行先より年賀狀……………一〇〇

一八 元日や……………内藤鳴雪……………一〇二

一九 無類の的……………一〇四

二〇 紋所の話……………沼田頼輔(講演)……………一〇六

二一 橘少佐の戦死……………田山花袋……………一〇九

二二 乃木將軍の長府……………一三六

二三 紅椿……………三木露風……………一三六

二四 我が幼時……………新井白石……………一三八

二五 精神一到……………一四三

一 堅忍不拔……………岡本章庵……………一四三

二 才子才ならず……………木戸孝允……………一四四

三	讀むこと千遍賦すること一萬首……………	原善……………	一四
四	俳人其角の意氣……………	依田學海……………	一四
二六	歌がたり……………	中村秋香……………	一五
二七	箕蟲に……………	落合直文……………	一五
二八	勞苦と快樂……………	小酒井光次(據)……………	一五
二九	無名の指……………	鳩翁道話……………	一六
三〇	伊能忠敬の晩學……………	幸田露伴……………	一七

目次終



純正國語讀本 卷二

一 現つ神明治大帝 その一

明治天皇御代知ろしめすこと四十五年、其の間に於いて、我が國運は前古無比の興隆を見た。これ偏に廣大無邊なる陛下の御徳の賜物であるといはねばならぬ。

天皇の御徳は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。天皇は幼くして御位に即かせられ、國難のつゞき起こる間に處して、連綿不斷に驚くべき努

天皇の御徳は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。

連綿不斷の驚くべき努力の修養

民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。

萬機總攬

日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。

力の修養を積ませられた。天津日嗣の御子たることを深く自覺して、圓滿なる帝王の御氣象を備へさせられた。民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。古を存して新しきを立て、我が長を養つて萬國の長を兼ねさせようとつとめさせられた。萬機總攬の大御舵を慎重に無理なく操つて、國家國民を危険なく光明の理想地に導かうとつとめさせられた。日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。その御慈しみはあまねく無心の生物にも及んだ。天皇御一生の御詠歌四十萬首に餘り、その一々が陛下の大御心そのまゝの現はれてあるが、之れを拜しても、陛下の御盛徳が偲ばれる。

あさみどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

さしのぼる朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

わが心いたらぬくまのなくもがな

このよを照らす月の如くに

いそのかみ古きためしをたづねつゝ

新しき世の事もさだめむ

たひらかに世は治まりて國民と

ともに楽しむ春ぞうれしき

花見つゝあそぶ春日におもふかな

いそのかみ古きためし

わが民草の上

九重のうち

おとらぬ國となすよしもがな

たがへす民のいとまなき世を
照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草の上はいかにと
民のため心のやすむときぞなき

身は九重のうちにありても
戦ひの場のおとづれいかにぞと

ねやにも入らず待ちにこそ待て
いたで負ふ人のみとりに心せよ

にはかに風の寒くなりぬる
よきを取り悪しきを捨て、外國に

おとらぬ國となすよしもがな

よもの海皆はらからと思ふ世に

など浪風のたち騒ぐらむ

天皇の數知れぬ偉大なる御行跡の中で、殊に難有きは民
草に對する厚き思ひやりの大御心であつた。陛下は侍臣
等が御避暑御避寒を御勸め申すのに對して、曾て御聽き入
れ遊ばされたことがない。そしてそれが兵士や農夫等の
勤勞に對する厚き御同情と、國費を節したまふ思召とによ
つたことは、

年々におもひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

の御製によつても拜察される。又崩御の少し前、東京の近
縣に於いて陸軍大演習を行ふ計畫があつて、陛下には玉體

詠寄國祝

歌

詠寄國祝歌
あらたまのとし
をむかへてよろ
づたみひとつこ
ころにくにいば
ふらし

あらたまのとし
をむかへてよろ
づたみひとつこ
ころにくにいば
ふらし

明治天皇宸筆

と仰せられたので、恐懼して、演習地に御宿泊を願ふことに

御安泰のため、日々演習地から宮
城に還御あるやうに御願ひいた
したところ、いつまでも御許可が
なかつた。その中に期が迫つた
ので、取いそぎ御裁可を願ひ出で
ると、兵士どもは日々營舎には歸
らぬであらう、朕一人が宮城に歸
るのでは、統監の甲斐があるまい。」

改め、始めて御裁可が下つたといふ事である。

明治天皇は實に偉大なる帝王の天資を備へさせられた
上に、更に努力勵精の御修行を積ませられた名君であらせ
られた。吾等は其の御偉徳、御仁慈の最も纏まつて現はれ
た一節として、子爵石黒忠恵氏の謹話の一節を引くことに
する。

二 現つ神明治大帝 その二

石黒子爵はいはれる。

明治二十七八年戦役に際して、私は野戦衛生長官の役目

努力勵精の御修
行

石黒忠恵
退役陸軍々醫總
監、子爵
樞密顧問官
新潟の人

大帝に咫尺し奉るの光榮を得た
恐懼感激に堪へぬ。

を承り、凡そ一箇年間、廣島の大本營に於いて、明治大帝に咫尺し奉るの光榮を得た。その一年の間、日々御側に罷出て、拜見し、拜聞して、誠に恐懼感激に堪へなかつたことが澤山ある。

扈從する。

九月の十五日、廣島に御着きになると、私は停車場から扈從して、大本營へ行つて、二階に上つた。見ると、廊下の向うに扉があつて、大帝はそこから入御になつたが、やがて御部屋の中なる玉座の御椅子に御掛けになつた。私は御前に罷出でて御機嫌を奉伺した。それから各室を一應檢分しようと思つて、案内者をつれて廻つて歩いた。

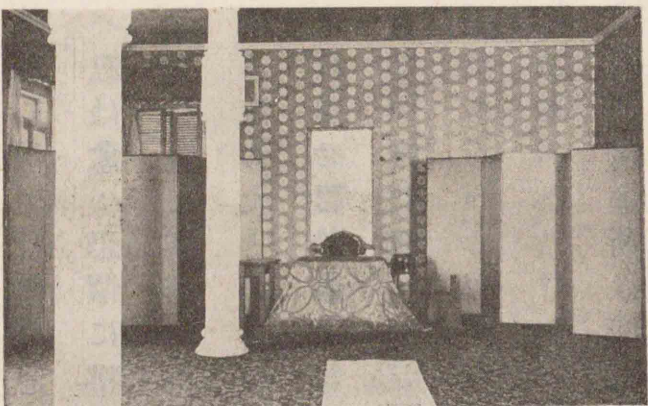
「御寢所は何處か。」

私はまづ尋ねた。案内者は答へた。

「御寢所と申して、別に御座いません。」

「どうして御寢みあそばすのか」と重ねて尋ねると、

「御座所のうしろに立てゝある、あの御屏風の陰に御寢臺がありまして、御寢みになる時には、玉座を他に移して、かほりに御寢臺を置き、御屏風で圍んで其



廣島大本營の玉座

處に御寢みを願ふことになつて居ります。」

聞き糺して見る

と答へた。御座所も御寢所も一つだといふのである。私は驚いた。では御休息所は？」と尋ねると、それもないといふ。私は愈々恐懼に堪へなかつたので、よく聞き糺して見ると、先日既に詳しい圖面を以て、宮内省を経て奉伺の上、右の通り定めたといふのである。いかに戦時の行在所であるとは申せ、畏くも至尊の御身を以てして、御寢所も御休息所もない、唯だ御一間だけの御座所とは、何といふ恐れ多いことであらう。私は感極まつて涙を呑むより外なかつたのである。

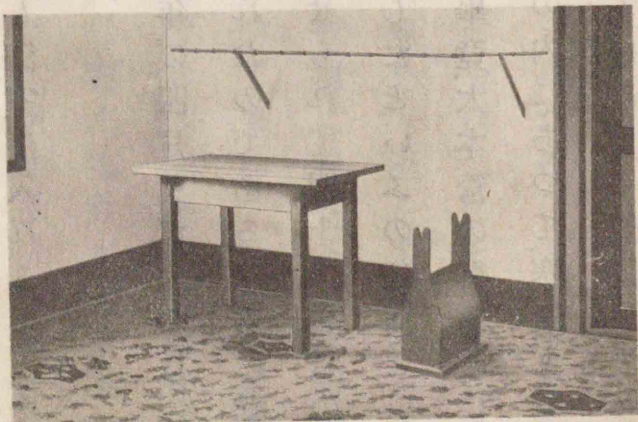
感極まつて涙を呑む。

此の御座所は斯様に手狭な上に、御室の備品としては、不
斷御掛けになる御椅子一つと、臣下に座を賜はる時の椅子

卓子一脚 屏風二
双

が三つあり、御前には卓子一脚と御寢臺、御書物の御筆筒と御屏風が二双あるだけで、他には何の御裝飾も無いといふ、極めて簡略なものであつた。そこで宮内省の人が、これでは如何にも御窮屈で畏れ多いから、たまには御休息遊ばすために安樂椅子を御室に備へてはといふので、御意を伺ふと、大帝は、

「戦地には安樂椅子が備へ付けてあるか。」



廣島大本營の御度調御机御掛御衣桁

大御心の忝さを
拜し奉る。

これは畢竟、國
民と辛苦を分か
たせらるゝ大御

と仰せられた。
此の御一言に大御心の忝さを拜し奉つた宮内官は、ひたすら恐懼して、遂に安樂椅子さへも御室に入れることを差控へたのである。

大帝は二十七年の九月から翌年の四月まで、八ヶ月の長い間を此の御座所に過ごさせられたのであるが、殊に酷寒の季節に暖爐の備附まで斥けさせられて、四十二疊敷の御室に僅か火鉢二つでお凌ぎ遊ばしたといふのは、何といふ畏れ多いことであらう。これは畢竟、大本營の御座所に在らせられても、テントやバラックの内にあつて、寒氣と戦ひつゝある將卒と苦しみを同じうし給ひ、又一般國民と辛苦

心に外ならなかつた。

を分かつたせらるゝ大御心に外ならなかつたのである。
大帝は非常に御嚴格にあらせられたけれども、その間にまた何ともいへぬ御温情があらせられた。その年の十月二十五日のことである。私は戦地を一巡して來いと仰せを蒙り、直ちに廣島を出發して戦地に赴き、各地を視察して、十一月二十四日の夜、廣島に歸つて來た。さうして翌日の御軍議の際、視察先の將卒の健康状態、士氣、氣候、物資の過不足、運輸の便否等について詳細に奏上したが、奏上し終はると、まづ第一に御下問になつたのは、朝鮮及び滿洲に出て居る軍隊の糧食に就いてであつた。
「飯は朝鮮米か、日本米か、それとも支那米か。」

かういふ御尋ねに對し奉つて、苟もあやふやな事は申上げられぬ。記憶して居る事でも、尙ほ念の爲めに調査した上でなくてはお答へができぬ。それで、私は一々手帳を見て、たとへば、

審かに言上する

「平壤に居ります兵は、朝鮮米を食べて居ります。義州に居る兵は、朝鮮米と日本米とを交せて食べて居ります。」といふ風に、審かに言上した。さうすると、

「朝鮮米には砂が澤山混つて居ると言ふことを聞いて居るが、其の朝鮮米を食べて居る兵が、齒を痛めるとか、腸胃を壊すとかいふことはないか。」

重ねての御下問である。

と、重ねての御下問である。私は實に恐れ入つた。そして

かく御答へ申上げた。

「朝鮮米を食べては居りますが、其の飯には砂が混つて居りませぬ。凡そ朝鮮米に砂が多く混つて居りますのは、朝鮮では稻を刈ると、陸田ならば直ぐに地上で乾かし、水田でも乾田の上に乾かして置いて收穫を致しますから、其の間に砂が多く混るので御座います。併し朝鮮で飯を炊きますには、内地の如き米磨桶を用ゐるずに、くり鉢で、米を磨ぎます。其のくり鉢の底には、轆轤で渦卷が彫付けてありますので、それに米を入れ、水を入れて磨ぎますと、砂は重いので、皆渦卷の中に入つて了ひますから自然に除かれます。随つて飯には砂が混りません。どうぞ

御安心遊ばすやうに願ひ上げます。」
と申上げて、彼地から特に持ち歸つた米磨鉢の渦巻を靴か
ら出して、御覽に入れた處、陛下も御安堵遊ばしたか、大層御
機嫌麗しく拜せられた。

三 現つ神明治大帝 その三

これも同じく其の戦地巡廻の折の話であるが、私は十一
月二日に朝鮮の漁隱島を出帆して、翌日兵站司令部のある
元浦に着いた。其處の司令官は陸軍少佐山縣俊信君であ
つた。私は其處の巡視を終へて、すぐさま出發しようとする



(分部) 像銅御帝大治明

天長の佳節。

音頭を取る。

酒が一樽、鏡を抜いてある。

ると、山縣司令官が引きとめて云ふのに、

「暫らく御待ちを願はれますまいか。實は現在此處に、將校、下士卒から軍夫まで加へて八十三人居りますが、正午にはそれらが全部山の上に登つて、盃を舉げて天長の佳節を祝し、陛下の萬歳を唱へたいと存じて居たところであります。そこへ閣下の御來臨は願つてもない幸ですが、どうか一つ音頭を取つて戴きたい。」

といふのである。私も大いに喜んで、

「それは結構な事ぢや。此方から願つても致したい位で。」と答へた。それから十一時に、司令官と一緒に山の上に登つて見ると、兵站部で用意した酒が一樽、鏡を抜いてある。

はたと困つた。

屈竟の盃。

又其の傍らには焼鯛を裂いたのが、筥に堆く盛つてあるが、肝腎な盃がない。司令官は、之れを見てはたと困つた。私も氣の毒に思つてゐると、司令官が俄に手を拍つて喜んで、「いや天佑々々。濱邊へ行くと牡蠣の貝が澤山ある。」

閣下、屈竟の盃が思ひつきました。」

といつて、直ぐに従卒をやつて蠣殻を拾はせた。暫らく経つと二人の従卒が筥に一杯づつ、きれいに洗つた蠣殻を持つて來た。

その時はもう十二時に近くなつたので、一同山上に整列して居ると、麓から一人の軍夫が、

「お待ち下さい。お待ち下さい。」

と云つて駆け上つて來たが、見れば手に日の丸の旗を持つてゐる。一同の視線は悉くその軍夫に集まつた。どうしたのかと怪しんで居ると、彼れはやがて私の前に立ち、其の日の丸の紙旗を差出して、

「閣下、これで音頭を取つて下さい。」

と言つた。私は直ぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、日本の方に向つて、恭しく「天皇陛下萬歳」を三唱した。一同はこれに和した。それから皆飲め、と言つて、牡蠣の貝で盛んに祝盃を舉げた。

其の時振つた旗を、あとになつてよく見ると、驚くではないか、半紙に、梅酔で紅く日の丸が染めてあつて、ところ／＼

にはまだ紫蘇の葉が附いてゐる。それを飯粒で細い竹に貼りつけたのである。私は其の牡蠣の貝と梅酢の旗とを鞆の中に入れて持ち歸つた。

さうして大本營に於いて陛下に此の事を奏上して、その二品を取出して御覽に入れた。すると、大帝はぢつとそれを御覽になつていらせられたが、そのうちに畏くも御眼に涙を御催しになつた。それを拜して、御前に畏つて居た私は勿論、川上も、寺内も、野田も、岡澤も、皆感極まつて泣いた。梅酢で旗を染めて聖壽を千里の外で祝し奉るといふ民があるのは、之れを御覽になつて御涙を催し給ふ君がおはすからだ、私はその刹那に、ひしと胸を打たれたのである。

川上操六

當時參謀次長兼

兵站總監

寺内正毅

當時野戰運輸通

信長官

野田裕通

當時野戰監督長

官

岡澤精

當時侍從武官

ひしと胸を打たれた。

それから、まだ恐れ入つた事がある。ちやうど是等の事を奏上し終はつた時である。陛下は突然、

「其の司令官の山縣といふのは、あの西南の役の山縣か。」と御尋ねになつた。私は、

「いかにも仰せの如く、西南の役に殊勳のありました山縣俊信で御座います。」

と御答へ申上げた。是れは山縣があゝの戦役に殊勳があつたので、特に勳四等に叙せられたのを御記憶あらせられての仰せである。西南の役以來十八年、當人は既に退役して居たのを、この戦争で召集されて、兵站部司令官となつて出征したのであるが、大帝は今や卒然として、其れは西南の役

殊勳があつた。

何といふ有難い
畏れ多い事であ
らう。

の山縣か。」と御下問あらせられたのである。恐れ入ると共に驚き入らざるを得ないではないか。幾ら軍功があつたにせよ、一大尉の名を十八年間も御記憶になつて居らせられるといふ事は、何といふ有難い畏れ多い事であらう。其の晩、私は山縣に長い手紙を書いて、此の君恩の忝さをつたへた……

これが石黒子爵謹話の大要である。吾々は大帝の御君徳、御仁慈に對して、實に言ふべき言葉を知らぬ。

四 胸を刻む國旗の上下

市井無頼の股。
韓信
漢の高祖の臣
淮陰の人、後淮
陰侯に貶せら
れ、呂后の爲め
に殺さる。
雲居禪師
元和年間の奇僧
土佐の人
攝津國勝尾寺に
住す。後松島瑞
巖寺に住し、伊
達政宗に優遇せ
らる。
熱涙を揮ひ、熱
鐵を呑む心地。

思出は床しいものである。西洋の語に、「苦しい事も思出となれば後光を放つて現はれる」と云つて居るが、誠に思出の樂しさは、快樂や成功のそれに限るのではない。悲痛、悔恨、失敗の思出の方が、或は快樂、成功以上の深い味ひを以て再現するかも知れぬ。市井無頼の股をくゞつた思出が、楚王となつた後の韓信の心に現はれた時、伊達政宗に額を蹴られた下駄の思出が、禪師となつた後の雲居の心に現はれた時、それは實に言語道斷の意味深き感じを伴つたであらう。

國家に於いても同じ事である。曾ては熱涙を揮ひ熱鐵を呑む心地して、辛うじて忍んだ經驗が、臥薪嘗膽の長い辛

臥薪嘗膽の長い
辛苦によつて偉
大な成功勝利を
勝ち得た。

無上甚深の感謝
をさ、ける。

苦によつて偉大な成功勝利を勝ち得た後に、振り返つて想
ひ起こさるゝならば、それは實に國民に取つて最大最高の
愉快であらねばならぬ。そして若し世に斯様な愉快を経
験し得たる國民があるならば、其の國民は、天に謝し、幸運を
悦ぶと共に、犠牲となつた先輩に對して無上甚深の感謝を
さ、げねばならぬであらう。

市島春城
早稻田大學名譽
理事

名は謙吉
新瀉の人
萬延元年生

千載の遺憾。

左に記すは市島春城氏の直話である。

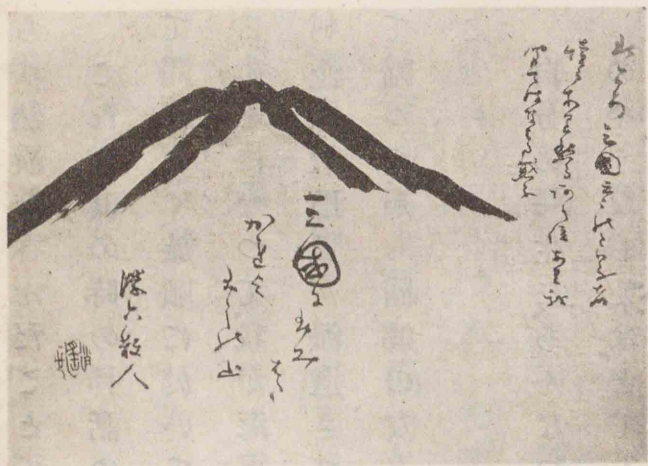
二十七八年戰役の最後に、謂はゆる三國干涉によつて遼
東半島を還附することになつたのは、我が國民にとつてま
ことに千載の遺憾であつた。當時、明治大帝が此の不慮の

勝海舟

明治維新の志士
初め從五位下安
房守、後に樞密
顧問官、伯爵
名は麟太郎、後
安芳と稱す
明治三十二年歿
年七十七

此ころ三國云々の
といふ者憤るあり
愁るあり泣くあり
我聞てはなはだ感
ふ。

濠六散人



勝海舟の諷刺畫

大事件について、いかに大御心を悩ましたまうたかは、拜察
するだに畏れ多いきはみである。勝海舟翁は「三國に踏み
はだかれよ富士の山」と詠じ、そ
れが一筆がきの富岳の畫に書
き添へられて、此の痛恨事の決
定した翌日の新聞に掲げられ
た。新聞雜誌は沈痛の筆を揮
つて一齊に、此の拂ひのけ得ぬ
外壓におさへつけられた國民
の鬱懷を代辯した。當時の我
が國民は、心こそ異なれ、一人殘

熱涙を呑む。

村上敬次郎
廣島縣の人
昭和四年歿

田原榮
理學者、語學者
元早稻田大學高
等豫科長
廣島縣の人
大正六年歿

らず熱涙を呑んだことであらう。これも其の時の挿話の一つである。還附の事がきまつて間もなく、旅順に於いて遼東半島還附授受の式が行はれることになつて、我が海軍からは、後の男爵、當時の經理局長村上敬次郎氏が派遣された。その村上氏が、役目をすまして歸つてから、同郷の友人なる田原榮氏に語られたといふことに、

「自分の一生に、あんなつらい思ひをしたことがない。あのやうなお使は、とても二度とは勤められぬ。還附の式としては、旅順の埠頭に今の今まで樹てゝあつた日章旗を卸して、その代はりに清國の黃龍旗を揚げるのだが、そ

實にやり切れなかつた。

一寸だめしのなぶり殺し。

腸九廻す。

悽愴の氣を添へる。

胸の張り裂けるやうな心地。

れがずん／＼と一思ひに下げ、一思ひに上げるのなら、何でもないが、揚げ卸しに約四十分もかゝるのだからね。それは實にやり切れなかつたよ。あの時の感じは、マア一寸だめしのなぶり殺しとでも言はうか、腸九廻すなどいふのはまづあんな事かと思つた。それに、此の光景に一段悽愴の氣を添へたのは海軍の軍樂隊が哀傷の譜を奏した事で、それが、二つの國旗の、人をぢらすやうな上り下りと調子を合はせて、物悲しい空氣を漂はせつゝ、四十分間もつゞくのだから、恥かしさ、悔しさ、腹立たしさで、實に胸の張り裂けるやうな心地がした。」と云はれたといふことである。さうもあらう。吾々は其

の折の村上氏の心地がよく解ると共に、今日から振り返つて見ると、何とも云はれぬ痛快な心地がする。そして同時に、當時事に當たつた先輩諸氏と、長く隠忍の努力を續けた國民とに對して、限りなき感謝を捧げたくなるのである。

五 おれの秋

おれの秋が來た。

目の秋、耳の秋

目の秋は澄み切つた

天上の月だ。

耳の秋は鳴き細る蟲の音に

木枯の音樂

カサコソと落葉をさそふ

木枯のさびしい音樂だ。

鼻の秋は木犀の

そこともない沈んだ香りに、

番茶を焙じるやうな

落葉をたく香ひだ。

肌の秋は寒暖の中ちやうどを得て、

身體にしまりを與へる涼しい空氣だ。

最後に口の秋、味覺の秋、

これがおれに取つて第一の秋で、

番茶を焙じるやうな落葉をたく香ひ。

空に眞紅の瓔珞
を飾る。

咽喉に甘露の濃
漿を注ぎこむ。

茸に、魚に、野菜に、果物に、
數は多いが、
わけて第一は柿だ。
空に眞紅の瓔珞を飾つて、
恣まに目を悦ばして後、
咽喉に甘露の濃漿を注ぎこむ
あの柿だ。
妙丹、衛門、鶴の子、縞御所、禪寺丸、
家の庭のだけでもこれだけある、
ゆかしいあの柿だ。

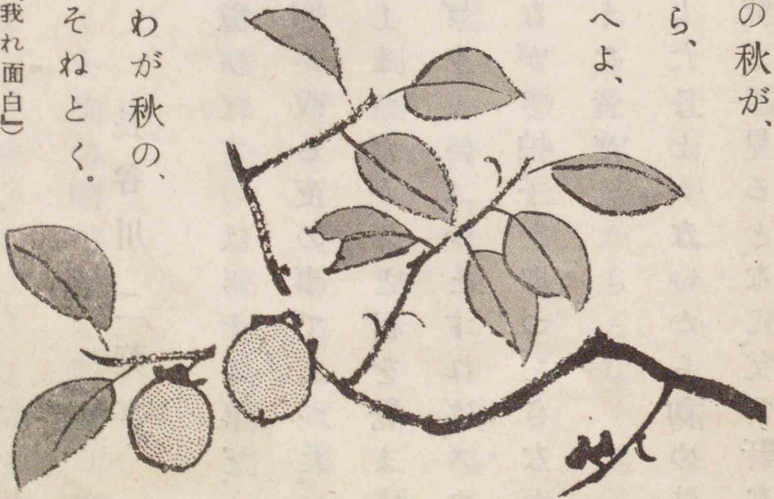


日本の選まれた
る是等の秋。

これでもかくと
押寄せて來
る。

あゝ日本の選まれたる是等の秋が、
おれの眼耳鼻舌身の五官から、
見よ、聞けよ、香へよ、ふれよ、味はへよ、
讚めよ、稱へよ、これでもかくと
隙間もなく押寄せて來る。
あゝおれの秋が來た、
忙しい、しかしながら楽しい
たのしい秋が來た。
目路遠くあこがれし秋のわが秋の、
目近く來たりな行きそねとく。

〔我れ面白〕



六 愛犬ポチ

長谷川 一葉亭

長谷川一葉亭
明治の小説家
名は辰之助
名古屋の人
明治四十二年歿
年四十八

宵の口から寐て
しまふ。

大鋸で大丸太を
挽き割るやうな
音だ。

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひだすのはポチの事だ。
春雨のしとくと降る薄ら寒い或る夜の事であつた。
私は例の通り宵の口から寐てしまつたが、ふと目を覺ます
と、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとするれば、スウ
と、或ひは高く、或ひは低く、單調ながら拍子を取つて、さなが
ら大鋸で大丸太を挽き割るやうな音だ。
私は夜中に滅多に目を覺ましたことがないから、初めは
ひどくびつくりしたが、能く研究して見ると、なに、父の鼾な

嚙子の手が込ん
で来る。

手に取るやうに
聞こえる。

ので、やつと安心して、其のまゝ再び眠らうとしたがどうも
それが耳に附いて寐附かれない。仕方がないから、聞こえ
るまゝに其の音に聽き入つてゐると、何時からとなく嚙子
の手が込んで来て、合の手に、遠くで微かにキャン／＼とい
ふやうな音が聞こえる。鼾が凄じい時には、それに氣壓さ
れて聞こえぬが、鼾が低くなると判然と手に取るやうに聞
こえる。不思議に思つて益々耳を澄ましてゐると、次第に
大きく、高くなつて、遂には鼾とは離れ／＼に、確かに門前に
聞こえる。

かうなつて見ると、疑ひもなく小狗の啼聲だ。時々咽喉
でも締められるやうに、けた／＼ましくキャン／＼と啼き立

聲尻がやがてか
ばそく悲しげに
なつて、めいる
やうに遠い／＼
處へ消えて行
く。

てる、其の聲尻がやがてかばそく悲しげになつて、めいるやうに遠い／＼處へ消えて行く——かとするれば、忽ちまた近くで、堪へ切れぬやうに啼き出してクン／＼と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギャオと欠伸をするやうな時もある。

私はそつと夜着の中から首を出して、

「小さい狗の聲だねえ。 どうしたんだらう。」

と、うるさく母にきくと、母はやさしく、何處かの人が棄てた狗であらうと、一々説明してくれて、「もう晚いから、黙つてお寐。」とやさしく言つて、あちらを向いてしまつた。

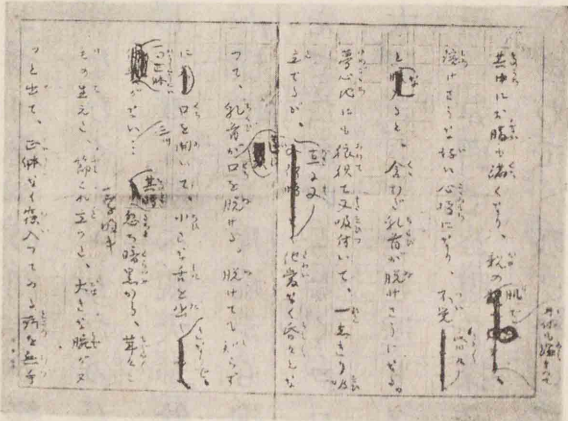
私も亦夜着をかぶつた。 狗は門前を去つたのか、啼聲が稍、遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳に附く。 寐ら

ドサリと横にな
る。コロ／＼と
轉がる、ヨチヨ
チと這ひ寄る。
小さいから舌の
先でたあいもな
くコロ／＼と轉
がされる。

れぬ儘に、私は夜着の中で棄狗の有様を繰返し／＼考へた。 まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。 ちつぽけな、むく／＼したのが、重なり合つて首を擡げて乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へドサリと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから舌の先でたあいもなくコロ／＼と轉がされる。 轉がされては大騒ぎして起き返り、又ヨチ／＼と這ひ寄つて、ポッチリと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてゝ吸ひ付いて、小さな兩手で揉み立て／＼吸ひ出すと、甘い温かな乳汁が出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。 と、腋の下からまだ乳首に有り

附かぬ兄弟が鼻面で割り込んで来る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突張り大騒ぎやつて見るが、到頭取られ

てしまひ、又其處らを尋ねて他の乳首に吸ひ付く。其のうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、溶けさうな好い心持になり、ついうとくとなると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわて、又吸ひ付いて、しきり吸ひ立てるが、ぢきに又たあいなくうとくとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱け



長谷川二葉亭筆蹟(平凡原稿)

お腹がくちくなくなる。

ついうとくとなると、含んだ乳首が脱けさうになる。

一向正體がない。

忽ち暗闇から大きな腕がヌツと出て、正體なく寐入つてゐる所を無手と引つ掴み、宙に吊す。

ても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。其の時忽ち暗闇から大きな腕がヌツと出て、正體なく寐入つてゐる所を無手と引つ掴み、宙に吊す。驚いて目をポツチリ明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞りさうだから、出ようとするが出られない。暫らくもがいて居る中に、ふと足搔が自由になると、領元を撮まれて、高いく處からどさりと落された。うろくとして其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰れも居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよばたれ、怖ろしく寒くなる。身慄ひ一つ

雨に打たれて見る間に濡れしよばたれ、怖ろしく寒くなる。

よち／＼と這ひ出す。

して、クン／＼と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よち／＼と這ひ出し、夜中を唯だひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る、その聲が、さつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲がまさしく玄關先に聞こえる。

うんざりする。

私はたまらなくなつて、母に頼んで、此の小狗に食物を與へて一晩泊めてやることにした。犬嫌ひの父は泊めた其の夜を啼き明かされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐ひ出すと言ひ出したから、私は小狗を抱いて逃げ廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐる。

だが、併しそれも一時の事で、其の中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなると、逐ひ出す筈の者に、何時しかボチといふ名まで附けて、姿が見えぬと、父までが一しよに捜すやうになつてしまつた。

犬好きは犬が知る。私のボチを愛する心はボチにも自然と通じてゐたらしい。

犬好きは犬が知る。私のボチを愛する心はボチにも自然と通じてゐたらしい。其の證據には、犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振り向きもせずに行つてしまふ事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて、目を輝かして飛んで來るが、しかし唯だそれだけの事で、其の時のボチは矢張犬に違ひない。

その犬に違ひないポチが私に對ふと犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか、どつちだかそれは分らんが、とにかく互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。

一目散に飛んで来る。
細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目とびつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱きに引んだ

朝起きて縁側に出る。私の聲を聞きつけると、ポチは何處に居ても一目散に飛んで来る。急いで庭へ降りると、ポチが透かさず泥足で飛び付く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目とびつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱きに引んだ。ポチは抱かれながら、身をもがいて大あばれに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、颯や頬までも舐める。

父が顔を擧めて、汚いくといふ。成程考へて見れば、汚いやうではあるけれども、しかし私は嬉しい、止められない。どうして是れが止められるもんか。私が何も好い物を持つてゐるぢやないし、ポチもそれは承知でする事だ。利害の念を離れてゐるのだ。唯だ懐かしいといふ刹那の心になつて居るのだ。毎朝これでは着物がたまらないと、母はそれをこぼすけれど、着物なんぞの汚れを厭つてポチの此の志を無にする事は出来た話でない。

〔平 凡い〕

七 動物の天國

上原 敬 二

上原敬二
林學博士
東京高等造園學
校長
東京の人
明治二十二年生

動物愛護の美風は文明國の一特徴とされてゐるが、この點から見て、アメリカは世界第一である。

アメリカ人は動物を見ると、まづ頭を撫てさする。

動物愛護の美風は文明國の一特徴とされてゐるが、この點から見ると、アメリカは世界第一である。彼等の目には、獸類と人間との差別がないらしい。その爲めであらう、動物の方でも人間に特別の親しみを持つてゐる。日本人は動物を見ると、すぐに石を投げたり棒を振りまはしたりするが、アメリカ人は動物を見ると、まづ頭を撫てさする。従つて動物の方にも人間を敵と思ふ心が無いらしい。日本ではしばしば、犬に吠えられるが、私はアメリカでもヨーロッパでも、犬が人に吠えついてゐるのを見たことが殆んどない。況んや犬に噛みつかれたなどいふことは話にも聞かぬことである。またアメリカでは犬の喧嘩と云ふもの

歐米では動物虐待防止會が、到る所に活動して居る。

を見たことがない。島國根性の犬は主思ひで敵愾心が盛んだが、之れに對して彼の國の犬は社交性に富んで居る。でも云ふのであらう。歐米では動物虐待防止會が到る所に活動して居る。殊にアメリカの都市では、馬を酷使するやうなことがあれば、重い罰金を課せられる。アメリカの馱馬、荷馬は、骨格が乗馬と全然違つて骨組が逞ましく、日本の馬の二倍位の力はあるが、それだけに荷が少し重いと、二頭三頭乃至四頭で曳かせる。かやうに優待される上に、道路がよくて車の摩擦が少ないから、彼等は皆よい氣持で軽々と引いて居る。それに、要所の辻々には馬の飲み水がある。その下には犬の飲み水もあるが、馬や犬の方で

アメリカの馬は
小さい子供を馬
鹿にしないで素
直にいふことを
聞く。

も、ちやんと心得てゐて、それぐ、間違はずに飲んで行く。
アメリカの馬は小さい子供を馬鹿にしないで、素直にいふ
ことを聞く。田舎へ行くと、よく見るが、小學校へ通ふ子供
が、二、三マイルもある處を、小さい馬車に乗つて、自分で手綱
を取つて馭しながら通學する。學校へつくと、運動場の隅
に出來てゐる厩に繋いで置く。時間中には小使が草を食
はせ、水をやりして世話をしてくれる。さうして歸りには、
此の小さな馭者がまたこれに乗つて歸つて來る。
アメリカでは牛を輓用としては用ゐない。田舎で、放牧
してある牛が、その邊を通る汽車に轢き殺されることがあ
ると、飼主は皮を剥いて持つて行つて、それを證據として損

アメリカではこ
れだけ牛の命が
大切にされるの
である。

害賠償を取ることが出来る。それゆゑ、放牧地では鐵道線
路に沿うて木柵を作り、所々に木戸を設けてある。そして
この木戸をあけ放しにして置いたものは、五十ドルの罰金
を課せられる。牛の頸へは鈴をつけて、その音によつて所
在が知れるやうにしてある。アメリカでは、これだけ牛の
命が大切にされるのである。
もう一つ日本人に珍らしいのは、公園にゐるリスやキネ
ズミの類で、彼等は草原の上、樹の根のまはりなどに、あの豊
滿な尾をふり上げては、チヨコ／＼と歩きまはり、落花生や
豆粒などを持つてゐる人を見ると、その傍へ寄つて來て、肩
や膝の上に乗つて、手の中から取つて食ふ。鳥類も同じ様

Chicago
Lincoln
Bronx

アメリカでは動物を大切にすること實に至れり盡くせりてある。

に人に馴れてゐて、日曜などにはよく、子供等がいろいろの食物を持つては、彼等を放し飼ひにしてある公園へくれにゆく。アメリカの公園の動物飼養はなかく盛んで、動物園は何れも無料で、時間に制限なくゆつくりと観覧を許す。動物舎の構造なども、實に大規模で、壯麗で、シカゴのリンカーン公園の猛獸館、紐育のブロンクス公園のそれなどは、寧ろ贅澤すぎる位、動物を大切にすること實に至れり盡くせりである。また都市の公園では、制札の敷は一體に少ないが、「花木を折るべからず」といふ風のものよりも、園内の鳥や小動物をいぢめると罰金を課する」といふ制札の方が遙かに多いのを見ても、此の國がまさに動物の天國であることが知られる。

〔わたり鳥の記に據る〕

八 趣味の武藏野

國 木 田 獨 歩

國木田獨歩
明治の小説家
名は哲夫
千葉縣の人
明治四十一年歿
年三十八

武藏野に散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ其の縦横に通ずる數千條の路を、當てもなく歩くことに由つて始めて獲られる。春夏、秋、冬、朝、晝、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此の路をぶらく歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させる

林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る處が何處にあるか。



國木田獨歩

ものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分
はしみぐ、感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこんな處
が何處にあるか。北海道
の原野には無論のこと、那
須野にもない。其の外何
處にあるか。林と野とが
斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して
居る處が何處にあるか。武藏野に斯かる特殊の路のある
のは、實に此の故である。
されば君若し、一つのこまぢ小徑を行き、忽ち三條に分かるゝ處
に出たら、困るに及ばない。君の杖を立て、倒れた方に行

君の杖を立て、倒れた方に行き給へ。

頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福である。
見わたしの広い野が開ける。
尾花の末が日に光つてゐる。

き給へ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ほど
に到つて又二つに分かれたら、其の小なる路を選んで見給
へ。或は其の路が君を妙な處に導く。其處は林の奥の古
い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかり
の空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いて居るこ
ともあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福
である。すぐ引き返して左の路を進んで見給へ。忽ち林
が盡きて、君の前に見わたしの広い野が開ける。足元から
少しだらく、下りになり、萱が一面に生えて、尾花の末が日
に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に脊の低い林が一
叢繁り、其の林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡

小春の日の光が
長閑に照り、小
氣味よい風がそ
よくと吹く。

右に行けば林、
左に行けば坂。
君は必ず坂を登
るだらう。

淡しい雲が集まつて居て、雲の色にまがひさうな連山が其
の間に少しづつ見える。小春の日の光が長閑に照り、小氣
味よい風がそよくと吹く。若し萱原の方へ下りてゆく
としたら、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小
さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が、萱原
と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄んで、
大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の濤うらに
は枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の濤うらの徑みちを暫ら
く行くと又二つに分かれる。右に行けば林、左に行けば坂、
君は必ず坂を登るだらう。兎角武藏野を散歩するのに、高
い處高い處と選えらびたくなるのは、何とかして廣い眺望を求

めるからで、それで其の
望みは容易に達せられ
ない。見下すやうな眺
望は決して出来ない。
それは初めから諦めた
がい。

若し君、何かの必要で
路を尋ねたく思はゞ、畑
の眞中に居る農夫に聞
き給へ。農夫が四十以
上の人であつたら、大聲



武藏野の農家

若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

をあげて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。教へられた道を行くと、道がまた二つに分かれる。教へられた方の路は、餘りに小さくて少し變だと思つても、其の通りに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果たして變だと驚いてはいけぬ。其の時農家で尋ねて見給へ。門を出るとすぐ往來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果たして見覚えある往來。なる

程これが近路だなど、思はず微笑をもらす。其の時始めて教へてくれた人の有難さがわかるだらう。

眞直な路で兩側共十分に黄葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩む事がどんなに樂しからう。右側の林の頂には夕照が鮮かに輝いて居る。折々落葉の音が聞こえる許り、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後ろにも人影見えず、誰れにも遇はず。若しそれが木葉の落ち盡くした頃ならば、路は落葉に埋もれて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見すかさず、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。尙更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時

折々落葉の音が聞こえる許り、四邊はしんとして如何にも淋しい。

梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。

まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて別な路を當てもなく歩くが妙。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。

時慌だしく飛び去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。同じ路を引きかへして歸るは愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な路を當てもなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を得ることがある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るが中に様々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つて、終りは暗澹たる雲のうちに没してしまふ。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は

武藏野は暮れんとする。寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。

風が今にも梢から月を吹き落しさうである。

燕村の句

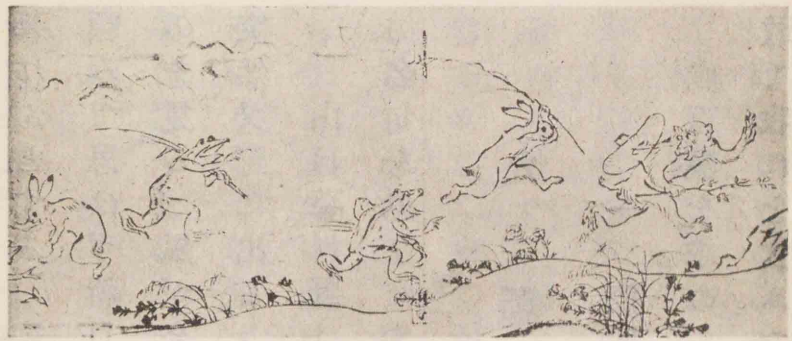
暮れんとする。寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさうである。突然又野に出る。君は其の時、山は暮れ野は黄昏の薄かなの名句を思ひだすだらう。

〔武藏野〕

九 三種の計略

一 狡狐虎威を假る

虎百獸を求めて之れを食ふ。狐を得たり。狐曰はく、子敢て我れを食ふことなかれ。天帝我れをして百獸に長た



鳥羽正僧筆動物戲畫

らしむ。今子我れを食はゞ、是れ天帝の命に逆ふなり。子我れを以て信ならずと爲さば、吾れ子が爲めに先だち行かん。子我が後に隨ひて觀よ。百獸我れを見て敢て走らざらんや。」虎以爲へらく然りと。故に遂に之れと行く。獸之れを見て皆走る。虎獸の己れを畏れて走るを知らず、以て狐を畏ると爲す。

参考

虎求百獸而食之。得狐。狐曰、「子無敢食我也。天帝使我長百獸。今

戰國策
漢の劉向作と傳ふ。周の安王より秦の始皇に至る迄の時事を國分に記せるもの。三十三卷。

菊池三溪
幕末明治の詩人文章家、名は純紀伊の人
明治二十四年歿年七十三



狐を心中に

子食我、我是逆天帝命也。子以我爲不信、吾爲子先行。子隨我後觀。百獸之見我而敢不走乎。虎以爲然、故遂與之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也、以爲畏狐也。

(戰國策)

二 小説家婢女を縊らんとす

菊池三溪

瀧澤馬琴名は解曲亭と號す。武州

江戸の人なり。嘗て一室に屏居し、思を著述に潜め、意匠慘澹、沈吟すること之れを久しうす。時正に午下、偶家人下婢をして茶を供せしむ。而して馬琴は一意攻苦し、背に人有るを知らず。獨語して曰はく、「今夜必ず下婢を縊り、其の衣物を掠奪し、屍を井の中に投じ、以て其の跡を滅せん。妙計と謂ふべし」と。因つて筆を擱きて微笑す。婢耳を戶外に側て、之れを聞き、驚悸して謂へらく、「主翁我れを殺さんと欲す」と。昏に及びて遁逃し、赤跣にて家に歸り、泣きて其の父兄に告げて曰はく、「兒今日壁を隔て、主翁の獨語を聞くに、命今夕に逼れり。速かに去らざれば、殆んど魚肉とせられん」と。父兄色然として其の家に舍匿し、病に託して暇を

乞ふ。馬琴之れを怪しみ、研詰すること一再、始めて其のよる所を首す。馬琴掌を抵ち、之れを諭して曰はく、「嚮きに某の稗史を著さんとし、命意沈吟して忽ち一奇趣を獲たり。欣然として自ら持すること能はず、偶然口に上す、豈に復た害心有らんや」と。婢の家の父兄大いに笑ひ、乃ち止む。

参考

瀧澤馬琴名解、號曲亭。武州江戸人。嘗屏居一室、潛

思著述、意匠慘澹、沈吟久之。時正午下、偶家人令下婢供茶

而馬琴一意攻苦、不知背有人。獨語曰、「今夜必縊下婢、掠奪其

衣物、投屍于井中、以滅其跡。可謂妙計矣。」因擱筆微笑。婢

側耳于戶外、聞之、驚悸、謂主翁欲殺我。及昏而遁逃、赤跣歸家、

泣告其父兄曰、「兒今日、隔壁聞主翁獨語、命逼今夕。不速去、殆

本朝虞初新誌
菊池三溪著
三卷、一種の短
篇小説集。

爲所魚肉。父兄色然含匿其家託疾乞暇。馬琴怪之研詰一再始首其所自。馬琴抵掌諭之曰嚮者著某稗史命意沈吟忽獲一奇趣欣然不能自持偶然上口豈復有害心邪。婢家父兄大笑乃止。

〔本朝虞初新誌稗史小傳〕

補義 山東京傳の稗史を著はすや意匠空湧筆飛び墨躍り抑遏すべからざるに當たつては寒暄兩ながら忘れ眠食共に廢す。家人の衣を添へ飯を報ずる茫乎として顧みず。圖書衾枕盃盤と與にし左右癩祭身其の間に食息す。

山東京傳著稗史當意匠空湧筆飛墨躍不可抑遏寒暄兩忘眠食共廢。家人添衣報飯茫乎不顧。圖書衾枕與盃盤左

右癩祭身食息其間。

〔本朝虞初新誌稗史小傳〕

三 矢丸礮聲怯を勇となす

大槻 磐 溪

岩間大藏人となり魁梧にして儼然たる一丈夫なり。信玄之れを伶人の中より抜きて以て士伍に列ぬ。しかれども性怯懦にして死を畏ること殊に甚だし。信玄之れを戦陣に試みるに七たび進みて七たび退く。信玄曰はく是れ常法を以て馭すべからず。我れ聞く西域崑崙山の鐵は化して金となると。則ち人の性の怯懦なるもまた鼓鑄如何にあるのみと。一日戦に臨み俄に大藏を捕へて之れを

大槻磐溪
仙臺藩儒
磐水の二子
名は清崇
字は士廣
通稱は平次
明治十一年歿
年七十八

竹牌の外に縛し、敵に向つて坐し、寸歩も動くこと能はざら
しむ。則ち矢丸雨下して、礮聲雷の如し。大藏膽落ち神死
して、また人の色なし。幸にして中たらず、戦を竟ふるまで
惴々として以て恙なきを得たり。大藏是に於いて翻然と
して改悟して曰はく、「人苟も命あらば、矢丸すら且つ中たる
こと能はず、死豈に畏るゝに足らんや」と。これより戦ふ毎
に勇を鼓して先登し、遂に以て驍名を成せり。

参考

岩間大藏爲人魁梧儼然一丈夫也。信玄拔之、伶人中、
以列士伍。而性怯懦、畏死殊甚。信玄試之戰陣、七進七退。
信玄曰、「是不可以常法馭焉。我聞西域崑崙山鐵化爲金。則
人性怯懦亦在鼓鑄如何耳。」一日臨戰、俄捕大藏、縛之竹牌外、

柳澤健

現代の詩人
福島縣の人
明治二十二年生

使向敵坐、寸歩不能動。則矢丸雨下、礮聲如雷。大藏膽落、神
死、無復人色。幸而不中、竟戰惴々、以得無恙。大藏於是翻然
改悟曰、「人苟有命、矢丸且不能中、死豈足畏哉。」自此每戰、鼓勇
先登、遂以成驍名。
〔近古史談〕

一〇月

柳澤健

小鳥眠れる丘の木立を、

月はしづかにのぼりてきたる。

月よ、月よ、木立をはなれて、

夢みてねむれる
小鳥を見すて、

ひとり いづこへ さまよひいづる。
夢みてねむれる小鳥を見すて、
ひとり いづこへ さまよひいづる

丘越え谷越えは
てなき旅に

月はこたへず さみしくほゝるみ、
はるけき空へと さまよひいでぬ。
丘越え 谷越え はてなき旅に、
はてなき旅に 月はいそぐ。

一一 元七黒七鳥

秋の入日が茜色
に山を染める。

會津地方の或る山里の話である。

秋の入日が茜色に山を染める時分に、林の中では片羽が
白く片羽の黒い翼を持った鳥が、淋しい聲で鳴くといふ。
土地の人々は、之れを元七黒七鳥と呼んで居るが、この不思
議な翼と名前とを持った鳥の由來について、哀れにもまた
面白い物語がある。

「愚」と云ふ徳。
盈つる月、虧く
る月に日並を知
つた頃の話。

それは遠い昔の傳説である。人々がまた「愚」といふ
徳を有ち、鶏の聲に目をさまして、盈つる月、虧くる月に日並
を知つた頃の話である。近い世の事ではない。

其の頃、此の山里に獵を渡世とする一人の男が居て、其の
子に元七、黒七といふ兄弟があつた。二人の母は弟の黒七

めつきりと衰へて、頬に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。

がまだ幼い時分に、此の世を去つた。

元七黒七の父は其の後めつきりと衰へて、頬に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。日頃手馴れた半弓も、今は空しく壁にかゝつて埃の積もるに任せてある。無論氣紛れに、時折弦を鳴らして見ることはあるけれども、もう昔のやうな興に乗ることがない。獨酌の盃を傾けることもあるが、酒に映る吾が顔に老の影さへ見出だしては、徒らに淋しさを増すばかりである。

妻には先立たれ、獵には興を失ひ、酒にさへ寂し味を感じるやうになつては、何を樂しみに此の世に存命へよう。彼れは惘然として力なく其の日くを暮らした。

酒に映る吾が顔に老の影さへ見出だしては、徒らに淋しさを増すばかりである。

彼れはあらゆる慰安と希望とを其の二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感じる様になつた。寂しい晩年に一つの色彩を添へた。

一しきり彼れを襲うた寂しさは我が子の愛によつて拭ひ去られた。

しかし、それは暫らくの間であつた。やがて、彼れの眼には二人の子供の成長して行く様子が見え出した。そして彼れはあらゆる慰安と希望とを其の二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感じるやうになつた。げに寂しい此の父の晩年に一つの色彩を添へたのは、其の子供であつた。一にも子、二にも子、天にも子、地にも子、彼れはもう其の他を知らないやうになつた。

かくして一しきり彼れを襲うた寂しさは、我が子の愛によつて拭ひ去られた。磐梯おろしの吹き荒む寒い夜でも、三人が樂しく食事する爐のほとりには、紅の槽火が陽氣に燃えて、美しく暖かであつた。

かくて幾年かを過ぎて、或る年の秋である。時は獵の季節に入つて、弦音が日毎にあちこちの山に響いた。年こそ若けれ、獵人の血を受けた二人が、どうして家にちつとして居られよう。

彼等は父を促して打ちつれて山に入つた。二人は興に乗つて奥へくと這入つて行く。父は遂に二人にはぐれた。聲を限りに谷々峰々を呼びくらしただけけれども答がない。

子にはぐれた父は淋しき夕日の影をあびて、ぼんやりと我が家に歸つて來た。見れば、我れより先きに人の歸つた様子がない。しんとした静けさは忽ち父の胸に絶望の暗

父は遂に二人にはぐれた。
聲を限りに呼びくらしただけども答がない。
淋しき夕日の影をあびて歸つて來た。
しんとした静けさは父の胸に絶望の暗示を與へた。

示を與へた。

彼れは鼓動する心臓を抑へつゝ、コトリとも音のしない室に向つて、慌たゞしく子の名を呼んだ。答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく静かな空氣を驚かしただけである。

父の胸は益々穩かでなくなつた。彼れは上り框に腰をかけて黒い足袋を片足脱ぎかけたが、一寸ためらつて、すぐに山の方に引返した。而して廣い山の中を當てもなく歩きながら、わが子の名を呼んだ。

「元七！ 黒七！ 元七黒七！ 元七黒七！」
彼れは身も世もなく叫びに叫んだ。而して身にふりか

答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく静かな空氣を驚かしただけである。

身も世もなく叫びに叫んだ。

かる危険をさへ忘れて断崖荆棘の嫌ひなく、何處までも深入りした。

「元七！ 黒七！ 元七黒七

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

その翌朝であつた。始めて降りた霜は、樺の木の下に、片足に黒い足袋をはいて倒れてゐる老人の死骸を、白く悲しく染めてゐた。そして傍らの木の枝には、片羽が黒く片羽の白い翼を持った小鳥が、バタ／＼とさびしく羽搏きしながら、痛ましい血の聲に、

「元七！ 黒七！」

熱心なる親心、強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。

と啼きつゞけに啼いてゐた。

失踪した我が子の行方を捜す熱心なる親心、身を殺してまでも子の行方を尋ねる強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。

かくして哀しき傳説に生きる元七黒七鳥は、とこしなへに其の哀韻を啼きつゞけることであらう。 (趣味の傳説)

一二 向上

一 得益の二事

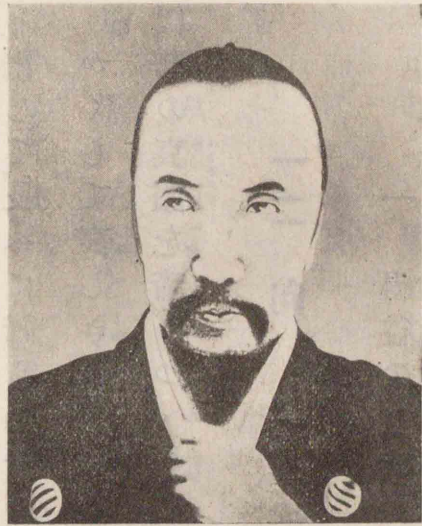
予門葉衰薄すと雖も、亦飽煖の中に生長し、未だ牢鍊寒苦

佐久間象山 幕末の志士、開國論者 名は啓、號は象山、通稱は啓之

佐久間象山

助、後修理と稱す。信州松代の人。元治元年歿。年五十四。

の境を経ず。常に一旦國家緩急あらば、起居飲食勝へざる所多からんことを恐れたりき。然るに去夏、彌利堅の舶突



佐久間象山

として至り、江都戒嚴す。予藩邸の爲めに軍務を經理し、眠ることを得ざる者七晝夜、精神倍奮ふ。今歳罪を得、獄に下る。糞食を飯ひ、鹽を噛み、重囚と伍を爲すこと數旬、

恬然として之れに安んじ、精神活潑にして、身も亦健康なり。此の二事、少しく自ら試験し、益を得しこと細からず。亦天の賜と謂ふべし。

参考

予雖門葉衰薄、亦生長飽煖之中、未經牢鍊寒苦之境、

常恐一旦國家緩急、起居飲食多所不勝。然去夏、彌利堅、舶

突至、江都戒嚴。予爲藩邸經理軍務、不得眠者七晝夜、精神倍

奮。今歳得罪、下獄。飯糞食、鹽、與重囚爲伍、數旬、恬然之

精神活潑、身亦健康。此二事、少自試験、得益不細。亦可謂天

之賜。

二 自 贊

佐久間象山

余年二十以後は、則ち匹夫一國に繋かることあるを知る。三十以後は、則ち天下に繋かることあるを知る。四十以後

は、則ち五世界に繋かることあるを知る。

参考 余年二十以後、則知匹夫有繋乎一國。三十以後、則知有繋乎天下。四十以後、則知有繋乎五世界。

三 航空仙

白 樂 天

白樂天
唐代の大詩人
名は居易

人仙を夢みる者有り。
夢に身、上清に升る。
坐して一白鶴に乗れば、
前に雙紅旗を引く。
羽衣忽ちにして飄々、

玉鸞俄かに錚々たり。
半空にして直下視すれば、
人世塵冥々たり。
漸く郷國の處を失ひ、
纔かに山水の形を分かつ。
東海一片白く、
列岳五點青し。

参考
人有夢仙者。夢身升上清。坐乘一白鶴。前引雙紅旗。
羽衣忽飄々。玉鸞俄錚々。半空直下視。人世塵冥々。
漸失郷國處。纔分山水形。東海一片白。列岳五點青。

濱田廣介
童話童謡の作家
名は廣助
山形縣の人

一三 一つの願ひ

濱田 廣介

ある町はづれに、一本の街燈が立つて居ました。そこは
人通りの餘りない、小路の角でありました。

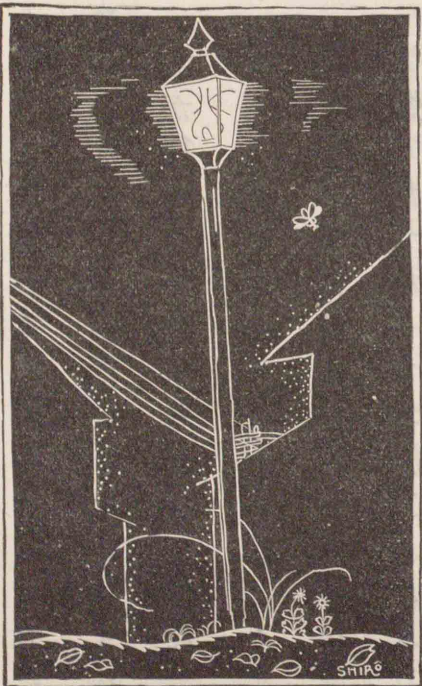
夏が来ると、草が茂つて、街燈の脛はざを隠します。高く伸び
た草の中に立つて居ると、街燈の脚は地から生えぬいて居
るやうに、しつかりと見えましたが、實際は大變違つて居ま
した。街燈は毎晩の様に、胸の中で思ひました。

強い風が一吹き
吹いたら、何も
かもお終ひだ。

「おれの一本脚はもう朽ちかけてゐる。今夜にも強い風
が一吹き吹いたら、何もかもお終ひだ。」

もし街燈が、人
間の様に手を持
つてゐたら、き
つとその瘦せ細
つた腰のあたり
を撫でて見たに
違ひありません。

もし街燈が、人間の様に手を持つてゐたら、きつとその瘦
せ細つた腰のあたりを撫でて見たに違ひありません。だ
が、手の無い街燈は唯だ胸の中で思ひつゞけるだけでした。



街燈はかう云つ
てあきらめよう

「きつとさうに違ひない。」
街燈はかう云つて、あきらめようとしたが、彼れには

「でも仕方がない。
年をとつて倒れる
のは、何も俺獨りだ
けぢやない。みんな
さうなんだ。二
本脚の人間だつて

としましたが、彼れにはあきらめようとすればする程、強くなる一つの願ひがありました。その願ひが一つあるばかりに、少し強い風が吹くと、すぐにぐらつく腰骨を、ぐつと力んで支へました。そして支へながら、終ひにはきつとかう眩きました。

あきらめようとすればする程、強くなる一つの願ひがありました。その願ひが一つあるばかりに、少し強い風が吹くと、すぐにぐらつく腰骨を、ぐつと力んで支へました。そして支へながら、終ひにはきつとかう眩きました。だが待てよ。間もなく俺は倒れてしまふ。それはどうにも仕方がない。だがそれにしてもどうだらう——まだ俺は星の様には見えないのかな。」

街燈のたつた一つの願ひといふのは、一生に一度、たつた一度でいゝ星のやうな明り位になつて見たいといふことでした。そのやうな願ひを抱いて、街燈は一つとところに何年か立つてゐました。けれども冗談にも「やあ星のやうだ。」

俺だつて此處に長い間かうやつて立つてゐて、とにかく道を照らしてゐる。

などと言つて通る者はありませんでした。「俺だつて此處に長い間かうやつて立つてゐて、とにかく道を照らしてゐる。たまには「あゝ明るい奴だ。」と言つてくれる者があるといゝがなあ。そして立ち止つて俺の顔をぢつと見て、「おや、こいつはまるで星みたいだぞ。」と來ると、尙ほいゝんだがなあ。」

こんな事を考へてゐる中に、夏もいつしか暮れてしまひました。腰のあたりを深く埋めてゐた草は、端から黄いろく枯れて來ました。顔のまはりに寄つて來て、うるさく飛びまはつて居た黄金蟲や蛾は、次第に減つてゆきました。そして街燈の光はいよゝゝさびしく見すばらしくなりま

した。

ある日の夕方、雲が動いて、空の様子が變はつて來ました。街燈は力のない目を空の方に向けながら光つてゐますと、その顔さきに飛んで來て、コツンとぶつかつたものがありました。見ると、翅の青い黄金蟲でありました。黄金蟲は、ぶうくと唸りながら飛びめぐりました。

「こがね蟲さんく」と街燈は呼びかけました。呼びかけられて黄金蟲は街燈の顎のあたりに掴まりました。

「どうだらうね、わたしの光が、あの星みたいに見えないかね。」

「何を、馬鹿な。」と黄金蟲は思ひました。そして答へもしな

何か思ひ出した
かのやうに、急
いで飛んでいつ
た。

まるで空家のや
うな氣がするな

いで、又ぶうくと飛びめぐりました。そして「ふん、寒くなつて來たんで、この街燈も氣がどうかしかつてゐるぞ。」と呟いて、何か思ひ出したかのやうに、急いで飛んでいつてしまひました。

誰れか來ないかと、又街燈は待つてゐました。すると間もなく一匹の白い蛾が來ました。蛾は黙つて街燈の顔のまはりをひらくと飛びまはりました。「何といふさびしい灯だらう。まるで空家のやうな氣がするな。」と蛾は腹のなかで思ひながら、尙ほあわたゞしく飛んでゐました。

「もしく蛾さん。」

蛾は聞きつけて止まりました。

街燈は涙ぐみま
した。けれどそ
の時でありまし
た。涙と一しよ
に静かな氣持が
胸の底に湧いて
來ましたのは。

「わたしは、あの星みたいに見えないかね。」
「星みたいに?」と、蛾は言ひました。そしてぶるくと微
かに翅をふるはせながら答へました。

「見えるもんか、そんな風に。馬鹿な!」

街燈はそのまゝ黙つてしまひました。「こんなちつぽけ
な蟲の目にさへ、星の様に見えないのなら、もう誰れだつて、
自分をさう見てくれはしないのだ。」と、街燈は覺つたからで
ありました。街燈は涙ぐみました。けれど、その時であり
ました。涙と一しよに静かな氣持が胸の底に湧いて來ま
したのは。

「もうかまはない——星のやうに見えなくつても。おれは

おれはたゞ黙つ
て光つてゐれば
いい。それがお
れの運命なの
だ。このまゝ、
この一生を終は
つてしまふ。さ
うだ、それでい
い。おれの役目
はそれでいい。

日がとつぷりと
暮れてしまふ。

たゞ黙つて光つてゐればいゝ。それがおれの運命なの
だ。このまゝで、この一生を終はつてしまふ。さうだ、そ
れでいゝ、俺の役目はそれでいゝ。」
さう言つて、自分で自分を慰めて、あたりを見まはしまし
た。さつきの蛾が、まだ眉のところにと止まつて居ました。
街燈は今の今がた、あんな事を尋ねた自分に氣がついて、何
といふ馬鹿であつたらうと思ひました。

「しつかりしよう。」

彼れはさう決心して、頭をもたげました。同時に街燈の
暗い光が、さつと明るくなつたやうに見えましたが、此の時
にはもうとつぷりと暮れてしまつて、空が一層暗くなつて

思ひがけない足音がして、二つの人影が現はれました。

來ました。そして黒い雲のきれ間に、星がピカ／＼と光つてゐました。「あらしが來るな」と、街燈が思ひました。

光は、再びさつと明るくなりました。

と思ふと、そこへ思ひがけない足音がして、二つの人影が現はれました。それは父らしい人と十一二歳になる男の子とでありました。暗がりの小路を辿つて街燈の前まで來ると、男の子は立ちどまつて、「お父さん」と呼びかけて、言ひました。

「この街燈、あかるいね。」

「あゝ明るいく。これが無くつちや歩けない、こんな晩には。」

ふと、男の子は眞暗な雲の切れ間に星を見つけて言ひました。「あの星よりも明るいなあ」

ふと、男の子は眞暗な雲の切れ間に星を見つけて言ひました。

「あの星よりも明るいなあ。」

これを聞くと同時に、街燈は思はずガタンと揺れました。悦びと驚きとで我れを失つたとたん、風に吹きつけたのです。けれども街燈はよろめく脚を踏みこたへて、叫びました。

「叶つた、叶つた——おれの願ひが叶つたぞ。」

その夜一晩、あらしは吹きに吹きましたが、あくる朝、弱々しい日のさしてゐる小路の上に、街燈が根もとから折れて

倒れてゐました。

「おや、こゝにも街燈が倒れてゐる。」と、路を通る人達は、たゞさう思つただけで、跨いで通り過ぎました。

〔椋鳥の夢〕

一四 落錢を拾ふ樂しみ

薄田泣菫

薄田泣菫

詩人、文學者

大阪毎日新聞社

社友

名は淳介

岡山の人

明治十年生

「世の中に何が嬉しいと云つたつて、途で落したお鳥目ちやうもくが自分の手に還つた時の氣持ほどいゝものはございませぬ。お上人様は御存じていらつしやいますか。」

かういふ話を良寛上人にしたものがあつた。この話をした男だつて、世の中にはもつと嬉しいことがたんとある

良寛上人

幕末の歌僧

俗名山本榮藏

越後出雲崎の人

天保二年歿

年七十四

行ひ澄ます。

のは知つてゐたらしいが、行ひ澄ました良寛に、そんな話も出来なかつたものだから、精々落したお鳥目位で濟ますことにした。



脚もとで二三度くるくくと舞つた。

良寛は手をのばして其の散錢を拾つたが、格別變はつた氣持もしなかつた。

良寛はそれと聞くと、不思議さ

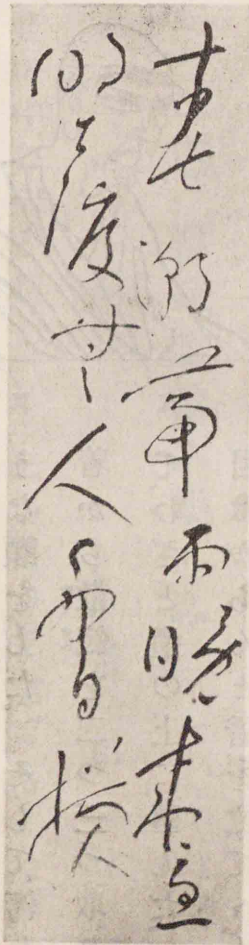
良うな顔をした。そして汚れた巾

着から散錢ちまきだを二つ三つ取り出し

て、わざと道の上に落した。お鳥

目はかちんと音を立て、上人の

「一向嬉しくない。何うしたもんだらう。」上人は呆けた顔をして、ぢつと考へ込んだ。「もつとたんと落さなくちやならないのか知ら。」



良寛筆

春潮雨を帯びて晚來なり、野渡人無くして舟自ら横はる。
春潮帶雨晚來急、野渡無人舟自橫。

先刻から上人の素振を見て、馬鹿のやうににや／＼笑つてゐた男は、一寸小腰をかゞめた。「お上人さん、今一度やつて見て下さい。さうしたら屹度お判りになるだらうと思ひます。」

人の素振を見る
小腰をかゞめた

お鳥目は一向顔を見せなかつた。

良寛は巾着に入れかけてゐた散錢を取り出して、また道の上に落した。散錢は上人に當てつけたやうに、そこらどころ／＼轉げ廻つてゐたが、いつの間にか草のなかに滑り込んで、そのまゝ姿を隠してしまつた。
良寛は手を延ばして、そこらを捜し廻つたが、お鳥目は一向顔を見せなかつた。坊さんはうろたへ出した。禿げた頭を唐辛のやうに眞赤にして、草のなかを掻き分けてゐたが、暫らくしてやつとこさで見つかつた。上人は汗ばんだ顔を持ち上げた。
「なる程、嬉しかつたよ。ほんとに嬉しいもんだな、落した錢を拾ふといふものは。」

一五 冬の雪國 その一

同じく我が國土の中ながら、琉球臺灣に住む人々は雪といふものを知らぬ。まして雪國の冬の有様など、彼等には嘘としか思はれまい。

寒國では霜が降り出すともうそろ／＼冬籠りの支度に取りかゝる。庭木や果樹は丈夫な丸太を支へとして、小枝をば縄で吊して雪折れを防ぎ、小さい木は板や蓆で圍つて、凍らぬやうにする。家の外側は、鴨居から二尺ほどあけて、其の下は悉く板で圍ふ。障子の合はせ目には、紙を貼りつ

積もつては消え
消えては積もる

雪催ひの寒い晩

けて、吹雪を防ぐ用意をする。これを目貼めはりといふ。雪圍と目貼とがすめば、冬籠りの支度はまづ整つたと云つてよい。遠山の頂に見えた雪が、次第に麓の方へ進んで来て、里に降りはじめるのは、凡そ十一月の初めであるが、それから積もつては消え、消えては積もる中に、冬至頃になると、地上の雪が、しつかり固まつて消えなくなる。これを「根雪」といつて、これから翌春の三月頃までは、地面を見ることがない。雪國の冬の生活は根雪から始まる。

根雪となれば、あとはたゞ降るばかり積もるばかり、寒い盛りには一日に五六尺も積もることがある。雪催ゆきまよひのひどく寒い晩は、よく爐に焚火して更けるまで語りあふ。外

おしつけるやうに寒くなる。

華氏の水銀が最下の一點に縮み

は森として何の音もない。空は眞暗で一物も見えぬ。話の進むにつれておしつけるやうに寒くなる。かういふ夜が最も多く積もる時で、翌くる朝目を覺ますと、耳が切られるやうに冷たい、息が凍つて夜着の襟が白くなつて居る。起き出でて臺所へ行けば、屋根裏の煤や蜘蛛の網が、銀モールのやうに眞白に凍つてゐる。これを「しらぶが張る」といふ。髭にも氷柱が下がる。銅盥を取れば手について離れぬ。鍋を取れば鉉が指に凍りつき、煙草を吸へば煙管の吸口が唇に凍りつく。無理にはがせば皮がむけてしまふ。窓を開けば積雪腰を没するばかり。えらい寒さだ、寒暖計は！と見れば、華氏の水銀が最下の一點に縮



雪の風景

込んで、ぼつち
りとも上つて居
らぬ。

み込んで、ぼつちりとも上つて居らぬ。

積もつた雪は踏み固め、或は拂ひのける。雪を踏むには「深沓」といふものがある。膝にかゝるほどの藁製で、一尺前後の雪にはこれで間に合ふが、二尺餘にもなればカンジキをかけねばならぬ。尙ほ深く積もれば、其の上に米俵をはき、下固めして其の上を再び固め直す。道が高くなつてからは、雪搔を以て道の兩側に搔き上げる。搔き上げるに随ひ次第に高くなつて、遂には銀のしろがね高い堤が出来上がる。其の堤が時としては二間以上になることもある。道幅の狭い、雪の拂へぬ處では、いつまでも踏み固めるので、道路が家の軒よりも高くなる。往來へ出るには、戸口から穴を掘り、

段階をつけて雪の梯子を上らねばならぬ。まるで一種の穴居生活である。

屋根の上にも雪が積もる。三四尺になると下さねばならぬ。謂はゆる「雪下^{おろ}して、年に三四回は普通である。下す毎に軒端の雪が益々高くなり、時には軒よりも高くなる。かやうな場合に最も人を困らすのは吹雪で、一吹き吹きすさめば屋根の雪と地面の雪とが平らに閉ぢ合はされてしまふ。家の内は闇になる。慌てゝ開けばやがて又閉ぢ合はす。全く人と雪との戦ひで、雪のやり場の無い處では、雪塊を橋に積んで遠方の川に棄てねばならぬ。雪中生活で最も怖ろしいのはザキといつて雪の上を走

る洪水である。幅の狭い河流は、嚴冬の眞中になると、やゝもすれば氷結する。氷結した上に上流の水が堰かれ、遂には積雪の上を走つて、高窓から瀧の如く室内に注ぎ込む。寒中のしかも窓の上から落下する洪水である。言葉通り、寐耳に水の大騒ぎで、町中總出して川筋の氷を切り開くあわたゞしさは言葉にも筆にも盡くされぬ。

一六 冬の雪國 その二

美しいのは氷柱である。方言に金氷^{かなこほり}ともいふ。細き太き短き長き無数の氷柱が軒から下がつた状は、研ぎすまし

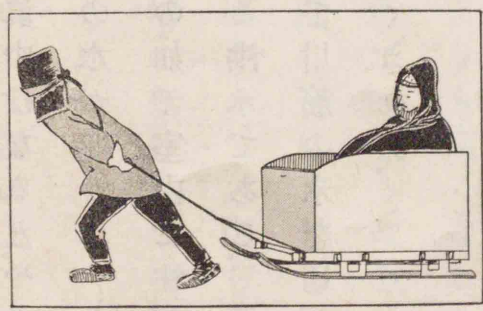
細き太き短き長き無数の氷柱が軒から下がつた状は、研ぎすまし

した劍を倒まに
吊したやう、筍
が倒まに生えた
やうである。

大厦高樓

た劍を倒まに吊したやう、筍が倒まに生えたやうで、それが日光を受けて照り耀く時は、水晶の簾かとも疑はれる。長さの四五尺、徑の二三寸は不斷に見る所で、大厦高樓から垂れ下がった氷柱には、徑二三尺、それが大地までつゞいて、地面から生え抜いた巨柱のやうに見えるのも少なくない。

子供の遊びには、雪達摩、雪女房、御堂作り、坂作り、隧道作り、雪合戦など、皆取り取りに趣味はあるが、わけて楽しげなのは雪滑りである。根雪になると車馬が廢つて橇の世の中になる。橇は雪中唯一



と 橇

道路の雪が磨り
みがかれて鏡の
やうになる。

物の数でもな
い。

の運搬器で、家として備へぬはない。晴天がつゞいて橇が頻りに通ると、道路の雪が磨りみがかれて鏡のやうになる。あぶないこと甚だしい。油断をすれば直ぐに轉ぶ。老人や用心深い人は、下駄足駄のうらに釘を打ち、藁靴に鐵カンジキをつけて、おづく〜とねらひ歩くが、待ちかねるは子供で、彼等は遅しと竹ボホラといふ滑下駄をはいて、パン〜ツウと勢よく滑り出す。橇あとの光る所をギガといふ。二三間のギガは物の数で



束 裝 雪

心ゆく遊び。

もない。賑やかな往來には一町あまり疵なしの鏡を展べた所もあり、巧みな子供は「先よけく」と呼ばはりながら、一二町は物の見事に一息に滑りぬく。馴れぬ者の側目には冷汗するほど危なく見えるが、馴れた者にはこれほど心ゆく遊びはない。

寒が明いて春雨が降り出すと、積もつた雪の嵩が減つて、どツしりと縮まつて来る。此の縮まつた雪の、夜半に凍つたのを「堅雪」といつて、これがまた暖國人には思ひもよらぬものである。今迄は綿の如く柔らかで、脛を没し身を没した雪が、堅雪になると、靴でも下駄でもぬからなくなる。田畑も野山も石のやうに堅くなる。かうなると學校に通ふ

子供は、田でも畑でも見通しに一直線の近路を行く。潤歩して、野山に魚かり兎狩りに出かける。「かんく」堅雪、甘いか辛いか嘗めて見る。「といふのが、彼等の堅雪を踏みながら唱へる文句である。

堅雪時の魚の捕り方が又面白い。小川ならば魚の居さうな所へ行つて、上流を堰きとめる。次ぎに目ざした場所へ雪塊を山の如く投げ込むと、水は忽ち干てしまふ。其のあとで泥を掻きわけて鯉、鮒、鱒、鯰、逃がす氣遣ひなく思ふままに生捕られる。池や、堀や、湖水ならば、厚氷を渡つて、目星をつけた所に行き、鋏や鋸で氷を割つて一二尺の口をあけ、板を以てしきりに水をかい出せば、大魚小魚潑刺として氷

大魚小魚潑刺として氷盤の上を躍りあがる。

盤の上に躍りあがる。塙保己一は燈火が消えた時に目明きの不自由を憫んだといふが、雪國の者の目には、暖國の方が却つて不自由に見えるかも知れぬ。

雪國には、雪の降るにつけて、また特別の職業がある。労働者の職業は雪おろし、雪掘り、雪運び等で、彼等は雪が降らねば仕事が無い所から、稼かせぎ道具の雪搔かきに燈明を供へて、白雪大明神降らせ給へ、降らせ給へ」と祈る。

處かはれば品かはる。

處かはれば品もかはるが、何處の隅でも、天の恵みの到らぬところはない。

一七 旅行先より年賀狀

寒になつても氷を見ることかめつたにない。
海岸には松の並木が立ちつゞいて、砂濱の向うには、鏡が浦の静かな波をへだて、遙かに富士のおごそかな影を望むことが出来ます。

謹んで年の始めの御喜びを申し上げます。きつと御無事で、めでたく新年を迎へられたことでせう。私は父の轉地保養の相伴をして、暮の二十五日から當北條にまゐり、海岸の木村屋といふ宿屋に泊つて、こゝで新年を迎へることになりました。大層暖かい處で、足袋をはくにも及ばない位、寒になつても氷を見ることかめつたにないと申します。海岸には松の並木が立ちつゞいて、砂濱の向うには、鏡が浦の静かな波をへだて、遙かに富士のおごそかな影を望むことが出来ます。樹木の間には、ちらほらと見える田舎屋に國旗の翻つて居るのも、珍らしい眺めです。來た當時は一人ぼつちで、淋しくつて困りましたが、段々

と友達が出来て、もう庭球、野球、歌がるたと、時の経つのを忘れるやうになりました。東京の御正月もさぞ面白いこと
でせう。学校の始まる前には歸京して、また面白く御一緒に遊びたいと楽しんで居ります。毎日御便りを待つて居ります。左様なら。

一八 元日や

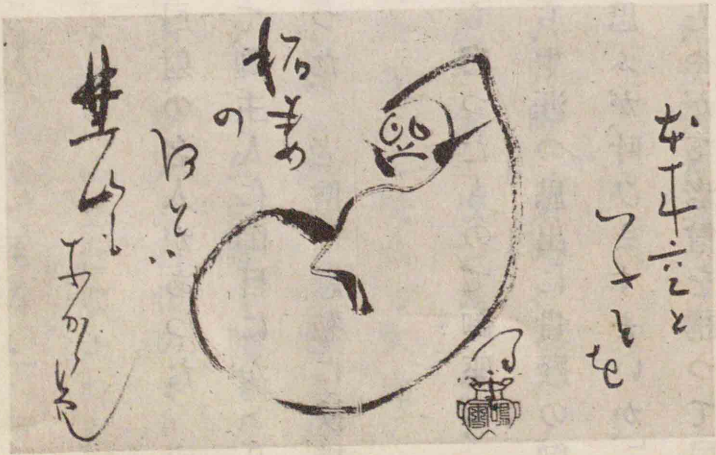
内藤 鳴雪

元日や一系の天子不二の山
流木のだぶりくと春の川
菜の花の瞳一里や嵯峨の寺

内藤鳴雪
俳人、漢學者
名は素行
伊豫松山の人
昭和元年歿
年八〇

本來空といふこ
とを
鳴雪
稻妻のあと野山
もなかりけり

大木の椿咲きけり山社
雀子や走りなれたる鬼瓦
古寺の廊下を通ふつばめ哉
若鮎の腹見せて行く淺瀬かな
木曾川は怒り木曾山は笑ふなり
大刀根の泡や流れて雲の峯
初織此處にも日本男兒あり
二君には仕へ申さぬ紙子かな
疲れ鶉の羽たゞきもせて哀なり
三千の大衆黙して冬の嶺
夏山の城ありくと夜明けたり



内藤鳴雪筆蹟

一九 無類の的

諸國行脚の老僧

奥州の白河に烏飼藏人といふ弓射の名人があつた。或る日諸國行脚の老僧が訪ねて来て、御主人に御目にかゝりたいと云つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、

「拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたもので御座る。

近頃不しつけなお願ひながら、生涯の思出に、貴殿の御射術を拜見させて戴きたい。

近頃不しつけなる御願ひながら、生涯の思出に、貴殿の御射術を拜見させて戴きたいと思ふが、叶ひますまいか。」と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓

藏人の顔には誇の色が見えた。

場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

「では、拙い藝を御覽下さい。」

此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂の上の茶碗の水はさゝ浪だに立たなかつた。

「では、拙い藝を御覽下さい。」と云つて、弓を取つて矢を番へた。同時に茶碗になみくと水をついで左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に二の矢が継ぎ、三の矢が継ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が繼いだ。前の矢の筈に後の矢の鏃が相接して、數本の矢が只だもう一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂の上の茶碗にはさゝ浪だに立たなかつた。一々の矢が的の正皓たかなを射たことはいふまでもない。老僧は感嘆して「あゝ」と言つたが、やがてつぶやいて、

まだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。

「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。」と云つた。藏人は聞きとがめて、

「御僧、何と仰しやりました。」

と尋ねた。老僧は

「いや詞で御答へは出来ませぬ。拙僧と一しよに山へ御出で下さい。」

と云つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

斷崖は一面に苔むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を托するに

二人は遂に高い山の絶壁に攀ぢ登つた。斷崖は一面に苔むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を托するに足るだけである。

足るだけである。

老僧は先に立つて、悠然として藏人をさしまねいだ。見れば藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして冷汗は衣をしぼつて踵まで濕ほして居る。老僧は云つた。

「足がかりは此の通りの大盤石で、向うには松が枝に鳶がとまつてゐて、無類の的で御座る。さ、御弓勢を御示し下さい。」

藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

藝に至つた者は我を去り、天地に同じて、どのやうな高い山、深い淵に臨まうとも、神氣の變はるものではない。

「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い山、深い淵に臨まうとも、神氣の變はるものではない。然るに御事は、前には誇る色があり、そして今はおどくして居られるではないか。まだ一御奮發を要しませうぞ。」

藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした。

藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした。そして驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつた。

〔甲鳥園隨筆〕

二〇 紋所の話

沼田頼輔

紋章學者
文學博士
神奈川県の人

沼田 頼輔（講演）

我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黒紋付とも申す位で、禮服には必ず紋所を付ける事になつて居りますが、さて其の紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐない場合が澤山あります。私は常に之れを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて

居りました頃、同家で桐の替紋を用ゐて居られる事について理解しかねて困つたことがありました。又その後、歐洲大戦争の終はらうとする時分に、大阪朝日新聞社から白耳義國王に鶴丸の紋の附いた太刀を獻上する企てがあり、同社の海外特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが、解らなかつた爲め、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の参考にしたといふ事を聞き及んで、甚だ遺憾に思つた事がありました。さやうな事が動機となつて、私は紋所の研究に没頭することになりましたが、その取調に基き、我が國の紋章が、どう云ふ意味で用ゐられたかといふ事について、極めて大體のお話をして見たいと思ふのであります。

紋所の研究に没頭することになつた動機。

紋章の起原
我が國の紋章といふものは、本來武家時代に、或る標章を旗や幕の目印として使つたのに始まつたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのである。

尙武的紋章

我が國の紋章と云ふものは、本來、武家時代に、或る標章を旗や幕の目印として使つたのに始まつたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へば、劔^{けん}酢^そ漿^{じやう}草^{そう}、劔^{けん}葵^{あひ}、劔^{けん}桔^か梗^{げい}など云つて、劔を花の間に取合はせて居るのがそれで、そのみならず兜の鍬形や、總角や、脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは悉く紋所に用ゐられて居ると云つてもよいのであります。但し斯う云ふ武張つた紋所は多く武家に用ゐられたので、お公家衆には、かやうな紋所を用ゐて居るのが少しもありません。それ故私はこの種類の紋所を、尙武的紋章と申して居ります。之れを第一種として、第二種は、戦争の際の功名手柄を後

記念的紋章
戦争の際の功名手柄を後世に傳へる爲めに作つた紋章。

世に傳へる爲めに作つた紋章で、私はこれを記念的紋章と名づけて居ります。例へば徳富蘇峰氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が畫かれてあります。八角と云ふのは隅切



の折敷と申して、神様に供物を上げる時に用ゐるものであります。が、徳富氏のお話に依りますと、氏の先祖の方が天草の戦争の折に、敵の大將の首を取られ、之れを首實檢に供する爲めに、隅切折敷に載せて大將の見參に備へられた、それに因んで此の紋所を作られたと言ふこと、巴は昔から、一つの頭、二つの頭などと呼んだものですから、これを敵將の首に擬へ、折敷に載せて、新らしい紋所を組み立てたといふことは、いかにも武家に相應はしい話であります。斯う云ふ種類の紋所は澤山あつて、例へば關ヶ原の合戦に、土佐の檜井と云ふ士が、平塚爲家と云ふ大將の首を取つた記念に、生首を紋にしたなどいふ事もありました。源平屋島の戦

指示的紋章
苗字に因んだもの。

に那須與一が平家の扇を射落した、其の晴れやかな功名を偲ぶ爲めに、其の子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ゐて居るものがあるといふことでもあります。

第三種は私が指示的紋章と名づけて居るもので、概して苗字に因んだものであります。例へば、吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などいふ井の字の附く苗字の者が、井の字、或は井桁、井筒などを用ゐる類で、是等は其の紋所を見て、是れが何家の紋所かと云ふ事がすぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤といふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ゐて居るのも、此の種類に屬します。藤の

紋所については藤原氏から出た家が用ゐると云ふやうな説もありますが、全くの誤りで、それは、雲上明覽といふ書物に據ると、藤原氏から出た公家が總計九十七軒あつて、その中藤の紋を用ゐて居るものが僅か七家だけしかないのを見てわかります。

第四種は尙美的紋章と云ふので、これは多くお公家さんの家に用ゐられました。お公家さんには家々によつて、衣裳や車などの裝飾に代々極つて用ゐられた文様がありました。例へば、花山院家の杜若、或は今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、いづれも車や着物の文様として用ゐられたものが、後世紋所

尙美的紋章
公家の家々にて
裝飾に用ゐた文
様を紋所にした
もの。

が行はれるやうになつてから、其の方面に轉用されたものであります。是等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ゐる始められたものであるから、尙美的紋章といふべきもので、それは概して文様から移つて來たものであります。

第五種は信仰の意味から用ゐられたもの、即ち信仰的紋章ともいふべきもので、是れには随分澤山の種類があります。例へば戰國時代にはキリスト教が盛んに行はれたので、此の教を信ずる者は、多くクロッスを紋所と致しました。その一例を挙げると、有名な賤ヶ岳の三振太刀の一人、中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありました。それ

信仰的紋章
信仰の意味から
用ゐたもの。

中川清秀
信長に仕へた武
將
天正十年戰死
年四十二

故、其の子孫は、今でも「中川クルス」と稱して、パテント、クルスと云ふものを用ゐて居ります。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ゐて居りますが、これはキリスト教のアンドルューの十字架から出たものであります。御承知の如く島原の亂以來、キリスト教は厳しい國禁となつて、之れを信ずるものは、大名でも、士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召上げられると云ふ様な事になつて、此の教に關係のあるものは、片端からその影を潜めました。が、それにもかゝらず、戰國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵此の紋を用ゐて居りました。

信仰的紋章の中で、神様に關係のあるものは比較的澤山

趙州無字

神社にも社紋と云つて極つた紋所を用ゐて居るのがある。

あります。例へば鳥居、瑞籬、欄干、御幣、額、瓶子、千木、鯉木など、苟も神社に關係のあるものは悉く紋所となつて居ります。が、これを見てもさすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して佛教關係の紋所は多くありませんが、これは神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに本づくのであります。仙石子爵の紋所が「無」の字を用ゐて居るのは、禪宗の「趙州無字」と云ふ故事から來たので、少ない例の一つであります。

我々の家に紋所があるやうに、神社にも亦社紋と云つて極つた紋所を用ゐてゐるのがあります。例へば、天満宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の

龜甲に「有」の字の紋の如きが、それでありませう。出雲で「有」と云ふ字を用ゐるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎮座せられたのが十月であつたといふので、此の月を鎮座月と申して居りますが、十月の二字を組み合はせると「有」の字になるので、それを神紋に定めたのであると申します。とにかく我が國では、家にも神社にも定まつた紋章があつて、それに歴史的精神的の重大なる意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係學に取つて大切であるばかりでなく、之れについて一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜みともいふべきであります。

二一 橋少佐の戦死

田 山 花 袋

田山花袋
小説家
名は録彌
上州館林の人
昭和五年歿
年六十

小笠原君から首山、遼陽の戦、殊に橋少佐戦死の状況を精しく聞いた。小笠原君の語られるには、今回の戦は、まあ譬へて見れば、南山に大石橋を交せて、それが幾日も續いたやうなもの。私は河南の右手の觀戰山で見て居たが、毎日毎日打つては取れずに日が暮れる、實にどうなることかと心細い程でした。ですから首山一帯の山が取れた時には、それは實際欣喜雀躍で、私などは第一に飛び出して、先づ其の戰場へと出懸けて行つたのです。行つて見ると、首山一帯

欣喜雀躍

の敵の陣地の中でも、三十四聯隊、即ち橘さんの戦死した隊ですが、その聯隊の向つた山には、一番堅固な防備が施されてあつて、いつも御極りの鐵條網、それに狼狽ろうさいがあり、しかもそれが今迄見たのとは違つて、深いことも深いし、その窠あなの底には落ちたら刺されるやうに鋭利な鐵棒が立てゝある。實に、それは行き届いたものです。君も來る時、見て來られたでせうが、首山の麓の線路に添うた處に一つの村落があつて、其の前に鐵條網、それから少し前に兵舎の半ば建築しかけた柱が、何かの防備か知らんと思はれる様に立つて居つたであらう。あの附近が即ち激戦の區ちまただつたので、第三十四聯隊は右を行く、第六師團の一部は左を行く、敵は又こ

敵はこの村落に據つて頑強に抵抗した。

の村落に據つて頑強に抵抗し、其の後ろに小さな池がある、その向うの小高い處に、二三門の機關砲を据ゑて滅茶々に打ち懸けると云ふ有様、味方は其の附近でえらくやられたのです。私は先づ三十四聯隊の突撃した丘から登つて見ましたが、敵の掩堡えんぼが二段に築かれてあつて、その長い掩堡はまるで死骸！ 全部味方の死骸で埋められて居ると言つても好い。それは實に見



田山花袋

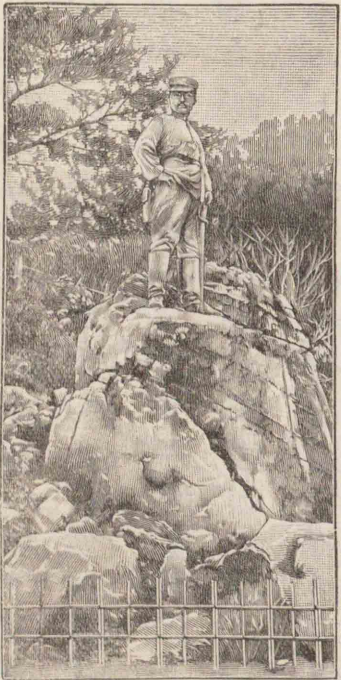
るに忍びんでした。南山の戦でも随分死骸を見る事は見
ましたが、それは多くは敵の死骸であつたので、まだ少しは
好かつたのですが、今度のは皆わが同胞……」

語りかけて言葉を止めた。其の時の慘状が胸に簇り浮
かんで來たのであらう。聽て言葉を續いて「それに、一番殘
念なのは橘少佐です。お互に宇品出發以來、どんなに御世
話になつたか知れんですからなア。君も知らるゝ通り、實
際人格の大きかつた人で、あの位しつかりした人は軍人に
も珍らしい。私は、その翌日だつたか知らん、他の村落の方
へ寫眞を撮りに行つて居たですが、其所でゆくりなく邂逅
したのが橘さんの馬卒。あの時ばかりは私も泣かずには

ゆくりなく邂逅
した。

意氣地なくも胸
が塞がつて、ど
うしても言葉が
出ない。

居られなかつた。 どうです君。馬卒は橘さんの遺骨と、そ
の奮闘した軍刀とを持つて、此方へ來る所でした。先生、僕
等を見ると、すぐ泣き出して了つたぢやありませんか。私
等もこれを見ると、意氣地なくも胸が塞がつて、どうしても
言葉が出ない。遂々名譽ある御戦死を爲すつたさうです



橘中佐銅像

ね、と言はうとして
も、それが出ない。
馬卒はまた馬卒で
涙を拭ひながら、黙
つて、其の軍刀を私
等に見せるので。其の軍刀には、實に勇ましい最期の程が

明らかに残つて居ました。先づ切先から二三寸ばかりは、丸で鋸の齒のやうに滅茶々々につぶれて、血が夥しく黒く乾いて着いて居たが、鏢の處には彈丸の透した痕が穴になつて居る。少佐は其の時屹度手に一彈を受けたに相違ない。實に、あれを見た時には、いろ／＼厚い御世話になつた事や、よく我々の宿舎に来て、何か不便なものは無いかと言つて呉れられたことや、その威嚴ある中に一種小兒をも懐かせるやうなやさしさを含んだ容貌や、何や彼やが潮のやうに集まつて来て、傍を向いて泣かずには居られなかつた。馬卒の話すのには、實に残念でした、私の漸く探して參つた頃には、もう瞑目なつて入らしつて、いくら動かしても、もう

動かれません。其の朝、いよ／＼突撃で御發ちになるといふ時、私を呼んで正午までにはどんなことがあつてもあの山を占領するから、占領した事が解つたら、馬と晝飯とを持つて來いと、の御命令。さて、どうなることかと見て居ました。初めはもう取れさうなもの、もう味方の國旗が立ちさうなものと思つて見て居りました。けれども中々そんな様子がありません。十時、十一時になつてもまだ其の山に敵が居て、盛んに味方を打つて居る。これはどうしたのかわらん。旦那の御身の上に、何か異變がありはせんかと思ひながらも、もう十二時近いから、晝飯の準備をして、いざと言つて來たら、すぐ行かうと、馬にも十分の糧秣を遣つて置

本當に橘さんは人望のあつた人で、誰れでも其の精神の確かり

きました。が、一時、二時、何とも言つて参りません。三時になると、段々味方のやられたことが解つて、旦那も御負傷なすつたのを、内田軍曹殿が介抱して居られる所を見たとき云つて知らせて呉れたものがありましたので、それから、私は騒ぎ出したのです。馬も辨當も投り出して、彼方此方と探し廻つたのです。けれども敵がすぐ上の山に居て、身を顯はすと打たれますから、どうする事も出来ません。到頭六時過ぎまでまご／＼して、漸く探し出した頃には、もう御瞑目、實に残念で残念で堪りません。……と言つて、おい／＼泣くので、我々も見るに忍びなかつた。本當に橘さんは人望のあつた人で、誰れでも其の精神の確かりして居るのと、慈

して居るのと、慈愛心の深いのとに對して崇敬の念を起さぬものはなかつたさうです。

其の思想の高潔なる實に古武士の風があつた。

愛心の深いのとに對して崇敬の念を起さぬものは無かつたさうです。現に第三十四聯隊に赴任されたのもついで此の間で、まだ一月と経たんですけれど、其の隊の士氣は見る／＼振つて來たと言ひますからなア。

「それに、平生教育家を以て自ら任じ、躬行實踐を第一の主義となし、其の思想の高潔なる、實に古武士の風があつたと云ふことです。其の廉で選抜されて一時は東宮殿下に劍術を御指南申上げたことがあつたさうですが、それを一生の榮譽と信じ、戦死する時にも、其の日は恰も殿下の御誕生日である事を記して忘れず、この目出度い日に戦死するのは、實に軍人としての本望であるが、多くの味方を殺し、しか

も一度占領した丘陵を敵に奪ひ回されたのは、いかにも残念である、死ぬまでそれを言つて居られたさうです。」
私は之れを聞いて、橘少佐の嚴格なる容貌が眼前に見えるやうな心地がした。そして黯然として面を伏せた。
〔從征日記〕

二二 乃木將軍の長府

私は大正八年七月二十三日の午後、赤間宮の寶物を拜觀して後、自動車を驅つて二里東の長府へ行つた。主として乃木將軍の舊邸を訪はんが爲めである。壇の浦を經、外艦砲撃記念の濱を過ぎ、滿珠干珠の二島を目近く右手に見て、

赤間宮

下關に在り、
安徳天皇を奉祀す。

自動車を驅る。

疎々密々と建て並べられた。

一寸左に曲ると、もうすぐに長府である。丘陵、田畑、森林、宮寺などが入り交はつて居る中に、人家の疎々密々と建て並べられた所で、小さいながら美しい町である。舊士族屋敷の其のまゝ残つて居るのも多いといふ事で、舊式な築地の土塀を繞らした家の目に留まるのも、床しい感じの一つであつた。此の町が名高いのは狩野芳崖と乃木將軍とを出した爲め、殊に將軍の自刃以來は、舊邸保存、記念館建設、神社建築等の仕事が次ぎ



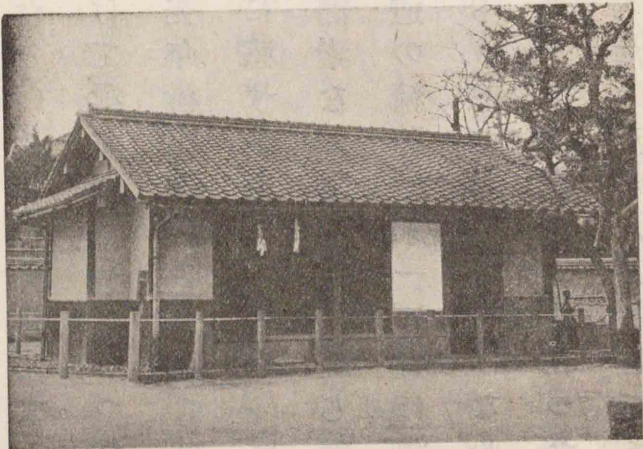
乃木將軍木像

狩野芳崖
明治の大畫家
長府の人
明治二十一年歿
年六十一

次ぎに營まれて、此の新らしい古武士を慕つて來る内外の巡禮も可なりに多く、今は殆んど「乃木の長府」の觀をなして居るといふことである。

私は先づ乃木將軍の舊邸を見た。邸は本道から左に折れて二三町行つた所の右側に在る。低い築地を左に見て門を入ると、すぐ左手にある小さな家、家といふよりは寧ろ小屋といひたいやうな、六疊三疊の二間から成る、天井無し、床違棚無しの極めて簡素な、總建坪八坪二合五勺といふ家、それがあの金銀の世に於ける鐵の如き人物を最初に鍊り堅めた^{そつ}埧^ぼであつた。座敷には親子三人對座の木彫が据ゑてある。將軍の甥なる長谷川榮作氏の作で、將軍の父が

それがあの金銀の世に於ける鐵の如き人物を最初に鍊り堅めた埧であつた。



登城前に其の子を教訓される所を寫したものである。座敷には是れといふ飾附が殆んど無い。けれども武士の嗜み道具の甲冑、弓矢物の具は、立派に堂々と飾つてある。多からぬ夜具や家財を大風呂敷に包んで、細曳の綱車で梁に吊してあるのも面白い。將軍の使つて

居られた粗末な小机の上には、一卷の中庸が載せてある。家の西の端に狭い土間の臺所があり、そこから壁を隔て、

武士道の精神が、家一ぱいに満ちくゝて居るのを見ては、我れ知らず息のつまるやうな心地がした。

西の軒下には、方言で臺白たいがらといふ踏白が据ゑつけてある。將軍は幼い時分に、これで米や麥を舂きながら本を讀まれたといふ事、肘を托する横木の上には、小さい見臺を仕掛けて、採みくしやになつた一冊の書物が載せてある。私は先年桃山御陵の一隅で、此の舊邸の模造まうしを見たので、初對面に感ずるやうな驚異の感には打たれなかつたが、それでも、簡素なる生活に安んじて君父の恩に報じようといふ武士道の精神が、家一ぱいに満ちくゝて居るのを見ては、我れ知らず息のつまるやうな心地がした。此の家はもと築地に沿うて往來近くに在つたのを、火災を恐れて二三間奥へ移したのだといふことである。

手澤の什器。

此の舊邸と差向ひに、小さい、背の高い洋風の乃木記念館がある。將軍手澤の什器や書類や衣服書簡等を集めたもので、その大部分は將軍の竹馬の友なる桂彌一翁の寄附されたものである。記念館の側に古い井戸と一本の老梅とがある。幼い時分の將軍の身を清め口を慰めたもので、其の梅の實は澤山蒔かれて、小さな苗木が、保存の費用を得る爲めに、一本三十錢づつで賣られて居た。舊邸の裏隣には、廣い敷地を構へて、臺灣阿里山の檜一式で、將軍の靈を安んずべき立派な社が建築されつゝある。吾等は乃木邸を辭してから、長府公園を見、公園内の圖書館で將軍の書入された書物を見、痛ましい仲哀天皇を奉祀

翁は乃木將軍の竹馬で、同郷の友、同味の友、而して最初から最後にわたる耐久最親の友である。

した忌宮神社を参拜し、それから、土地の名物翁、桂彌一翁を訪ねた。翁は乃木將軍の竹馬で、同郷の友、同味の友、而して最初から最後にわたつた耐久最親の友である。刺を通ずると早速客間に通された。そして待つ程もなく翁の姿が現はれた。鶴の様に痩せた、長身の、福々しい、目の優しい人で、乃木將軍についていろ／＼の記憶を、たどり辿り話された。そして愛藏された將軍の珍らしい手紙、殊に漫畫を挿んだ面白い手紙などを見せては、之れを實例に活用しつゝ、將軍が明治天皇の特別な恩寵を蒙られた事、下車する毎に湯豆腐を命じては鬱氣を散じながら旅をされた事、汽車では並辨當を食べて居られると、將軍の顔を知ら

ぬ若い士官達が、上等辨當で酒などあふりながら、田舎料理は食へないなどと盛んに氣焰を吐き散らす、其の間に、將軍は顔を見つけられて、若い者に恥かしい目を見せはせぬかと、遠慮しい／＼、片隅に小さくなつて行かれた事、書を善くしてよく書かれたが、絹地に書く事と額を書く事が大嫌ひで、たまに額を書く時には「秀顯」などいふ替名を用ゐて紛らはしい書體に書かれた事などを話された。

私はやがて暇を乞うた。翁は無論玄關まで見送られた。靴を穿いて「おさらば」を告げると、今度は門まで送られた。「有難う」と云つて門を出ると、今度は又門の外まで送つて出て、自動車、人力車の事まで、いろ／＼と心配された。

おさらばを告げる。

水車小屋のギイ、ゴットンと、手飼の牛のモウモウとに送られる。

かくて私は初対面の七十翁の懇ろなる見送を受け、翁の水車小屋の、ギイ、ゴットンと、手飼の牛の長閑なモウくとに送られて歸途についた。(遠近)

二三 紅椿

三木露風

三木露風

詩人

名は操

兵庫縣人

明治二十二年生

山越えて來たふるさとの、家の籬にたぐ一つ、紅い椿が咲いてゐる。あゝ紅椿紅椿、

ありし昔をそのまゝに、夢ともならで咲く花よ。

昨日吹いたる西風は、遠い響となつて消え、

今日麗かな海の町。



三木露風

あゝ西風の止んだやう、わが悲しみも過ぎ去つて、ひとりしみぐ海を見る。

ふるさとの、ふるさとの、
家の籬の紅椿、
その葉を越して
海を見る。

二四 我が幼時

新井白石

新井白石
江戸時代の學者
將軍家宣の侍講
名は君美
江戸の人
享保十年歿
年六十九

我が六歳の夏の頃、上松といひし人の少し文字などありしが、七言絶句の詩一首教へてその意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしを、人にも講じ聞かせたりき。「この兒文才あり。いかにも師を擇びて學ば

利根、氣根、黄金の三こんなくしては、學匠はなり難し。

戸部



新井白石

しめらるべし。などかの人もいひしかど、頑なる昔人たちのいひしは、「昔より言ひ傳へし事あり。利根、氣根、黄金の三こんなくしては、學匠はなり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根のほどもはかり難く、家富めりとも見えねば、黄金のことも心得られず。などいひき。我が父も「この兒、戸部の御いつくしみによ

りて、常に側を離れ參らせず、學に入れ師に従はしめんこともかなひ難し。されど幼きより物書くことを、戸部も人々

に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國に行き給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。

その冬十二月なかば、戸部歸り参り給ひしかば、常に傍らに侍ふこと故の如く、明けの年の秋、又國に行き給ひしあとにて、課を立てられて、日の中に行草の字三千、夜に入りて一千を限りて書き出すべし。」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ満たざるに日暮れんとすること度々にて、西向なる竹縁のある上に机を持ち出でて書き終へぬることもありき。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、われに附けられし者と密かに謀りて、水二桶づ

つかの竹縁に汲み置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄て、まづ、一桶の水をかぶりて、衣打ち着て習ふに、初めは冷やかなるに目覺むる心地すれど、暫し程經ぬれば、身暖かになりて、また睡くなりぬれば、水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶりぬるほどには、おほやうは課も満てたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりしほどに、この頃よりは我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の中に淨寫して参らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せ参らす。賞め給ふこと

戸部の人と贈答し給ふほどの文。

大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふほどの文ども、大方は我れに命ぜられき。
又十一歳の時に、我が父の友の關といひし人の子供は太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、我れにもこの技教へられんことを望みしに、わぬし未だ幼し。これ等の技學ばんことなほ早かり。といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀、脇差、腰にせんこと誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふところ誠に然なり。」とて、傳へて習はしめたり。かゝりしほどに、その年十六になりし者の、我れと藝を試みんといひしかば、木刀を執りて三たび合ひて、三たびまで勝つことを得たりしに、ぞ人々も亦

興に入りて笑ひける。

〔折焚く柴の記〕

二五 精神一到

一 堅忍不拔

岡本 韋庵

古より能く絶大の事業を成す者は、其の志氣の堅忍不拔なるによりて之れを致せり。必ずしも皆高才の士ならず。彼の少年夙成の者は、固より才智長進の兆にあらず。即ち是れ後日萎靡の候のみ。古人言へる有り、曰はく、陽氣發する處、金石も亦透る。精神一到、何事か成らざらんと。

自古能成絶大事業者、由其志氣堅忍不拔致之。不必

岡本章庵
名は監輔
阿波の人
明治三十七年歿
年六十八

皆高才之士也。彼少年夙成者固非才智長進之兆。即是後日
萎靡之候耳。古人有言曰。

陽氣發處金石亦透。精神一到何事不成。〔岡本子〕

二 才子才ならず

木戸孝允

才子は才を恃み愚は愚を恃む。少年の才子愚なるに如
かず。請ふ看よ他日業成るの日。才子は才ならず愚は
愚ならず。

才子恃才愚恃愚。少年才子不如愚。請看他日業成

日。才子不才愚不愚。

木戸孝允
維新三傑の一人
松菊と號す
長州の人
明治十年歿
年四十四

三 讀むこと千遍賦すること一萬首

原善

雨森芳洲人と爲り篤實にして精力老に到りても衰へず。
年八十一始めて將に和歌を學ばんとす。而して意に謂へ
らく詩は則ち時有りて之れを作る。稱すべきなしと雖も、
平仄を謬らざることを得。國風に至りては一も其の法を
解せず。先づ古歌を熟讀するに如くは莫し。今より古今
集を讀むこと一千遍、而る後に自ら賦すること一萬首なら
ば、其れ或は少しく通ずる所有らんと。乃ち二年を経て千
遍畢はり、又三年にして萬首なれり。

雨森芳洲爲人篤實精力到老不衰。年八十一、始將學

原善
幕府の儒官
念齋と號す
下總の人
文政三年歿

和歌、而意謂詩則有時作之。雖無可稱者、得不謬平仄。至國風、一不解其法。先莫如熟讀古歌。自今讀古今集者、一十遍、而後自賦者一萬首、其或有所少通焉。乃經二年、千遍畢、又三年而萬首就。

〔先哲叢談〕

四 俳人其角の意氣

依田學海

赤穂義士大高忠雄、其角と俳歌の友たり。其角之れに兩國橋に遭ふ。忠雄衣服破敝し、竹を擔ひて叫び賣る。其角之れを怪しみ、試みるに俳歌の首句を以てす。忠雄聲に應じて之れに賡ぎ、微かに其の意を示す。次夜友人と一幕士

依田學海
明治の學者、詩人、作家
名は朝宗
字は百川
下總佐倉の人
明治四十二年歿
年七十七

の家に出でて之れを見る。其の人滿身血に汚る。揖して曰はく、某は淺野氏の臣、大高忠雄也。同僚と與に吉良氏を襲ひ、以て主の讎を報ず。敢て告ぐと。主人未だ答ふるに及ばざるに、其角足を失して屋より墮ち、大呼す、其角此に在りと。因つて手を執りて慰勞す。辭氣慷慨、聲淚並び下る。後書を友に贈りて、詳かに其の事を記すと云ふ。嘗て門人數輩と舟を墨水に泛べ、三圍の社に詣づ。農夫の群を成して鼓譟するを見、其の故を問ふ。答へて曰はく、

夕立や田をみめぐりの神ならば

「旱すること甚だしく、野に青草無し。雨を神に祈るなり」と。門人請うて曰はく、「古へは名歌神を感ぜしめて、能く膏雨を致せり。師豈に意無からんや」。其角固く辭す。農夫之れを聞き、其の禿頭なるを以て、誤りて僧と爲し、争ひて來り拜して曰はく、「大和尚、大菩薩、苦しみを救ひ給へ、苦しみを救ひ給へ」と。其角已むことを得ず、歌を作り、之れを祠に奉りて默禱す。頃刻にして黒雲湧起し、倏忽にして天に漫り、雨颯然として來り、盆を翻すが如し。農夫謹呼し、門人大いに駭く。其角も亦何に由つて然るを致すかを知らざるなり。時に元祿六年六月廿八日なりきといふ。

參考

赤穂義士大高忠雄、與其角爲俳歌友。其角遭之、兩國

橋 忠雄衣服破敝、擔竹叫賣。其角恠之、試以俳歌首句。忠雄應聲廣之、微示其意。次夜與友人會一幕士家。家隣吉良氏。夜半殺聲大起。衆驚失色。其角獨知忠雄等、義舉喜甚。乘屋窺之。忽有一人叩門。主人出見之。其人滿身汚血。揖曰、「某淺野氏、臣、大高忠雄也。與同僚襲吉良氏、以報主讎。敢告。」主人未及答、其角失足墮屋、大呼「其角在此」。因執手慰勞。辭氣慷慨、聲淚並下。後贈書友、詳記其事云。嘗與門人數輩泛舟墨水、詣三圍社。見農夫成群鼓譟、問其故。答曰、「旱甚、野無青草、祈雨於神也。門人請曰、「古者名歌感神、能致膏雨。師豈無意乎」。其角固辭。農夫聞之、以其禿頭、誤爲僧、爭來拜曰、「大和尚、大菩薩、救苦救苦」。其角不得已、作歌奉

之祠レテ默禱ニシテ。頃刻ニシテ黑雲湧起シテ倏忽ニシテ漫天ニシテ雨颯然トシテ來リ如シ翻盆ニシテ。農夫
 謹呼ニシテ門人大駭ニシテ。其角亦不知ル何由致ラ然也ト。時ニ元祿六年六月
 廿八日ナリキトフ云。

〔譯海〕

二六 歌がたり

中村 秋香

中村秋香
 歌人、宮内省御
 歌所寄人
 静岡縣の人
 明治四十三年歿
 年七十
 香川景樹
 歌人
 號は桂園
 因幡島取に生れ
 京都に住む。
 天保十四年歿
 年七十六
 我がおもふまゝの
 心を三十一文

或人、景樹の許に來りて歌は詠まゝほしきものなれども、
 歌詞を知らざるによりてせんすべなしと歎きけるに、景樹
 打笑ひて、歌はさるむづかしきものにはあらず、歌詞は知ら
 ずも、テニヲハは心得ても、我がおもふまゝの心を三十一文
 字にのぶるが即ち歌なり。されば其のよむ事も花鳥風月

字にのぶるが即ち歌なり。

花鳥風月

には限るべからず、日用の事柄、臺所の道具にても、よまんと
 思はゞよまるべし。歌詞を知り、テニヲハを心得ねばよま
 れずといふ如きものにては、畢竟歌とはいふべからざるな
 りと、語らふ折から、門外を豆腐屋の豆腐々々と呼びつゝ賣
 りゆくを聞き、あの豆腐屋を題にて歌一つよみて見給へと
 いふ。其の人答へて、それは殊にむづかしき事なり、花とか月
 とかいふ事ならんには、知らぬながらも猶ほ何とかつゞけ
 方もあるべし、豆腐にてはせんすべなしといふ。景樹ほゝ
 るみて、左迄にむづかしく思はれんには、よみてきかせ參ら
 すべしとして、今そこに豆腐屋の聲きこゆなり、これにて上の
 句は出來たり。今門前に豆腐屋の聲きこゆる故に、其の儘

をいひたるなり。偕下の句「おさん出て呼べ行きすぎぬまに」これにて一首となりたり。別に歌詞にはあらず、常の詞なり。又其の趣向も珍らしき事にはあらず、家内にて常ある事なり。されば歌といひたりとて、歌詞を知らずてはよまれずといふが如きむつかしき事にてはあらずと、いひたりきとぞ。そもく、俗言もて述べたる歌は、兎角狂歌めきて品格を失ふものなるを、ひとり景樹の此の歌の如きは、全く俚俗の語をもて俚俗の事を述べたれども、何となく品格あり、歌の體を失はず。是れ景樹の景樹たる所以にして、その景樹の景樹たるは由る所あるに依る。さればこそ俗語をもてつらねたれども、此くの如き風調ある歌とはなれるな

此の歌の句調、
忽ち俗言をのせて
すらくと口
に出でたるまで
なり。

れ。其の由るところといふものこそ、歌よむ上に就きて心得おくべき事なれ。何ぞとなれば、景樹の此の歌は「高まどの尾上の櫻さきにけり、いざ見にゆかん散りすぎぬまに」といふ歌の句調に基きたるものなり。「今そこに豆腐屋の聲きこゆなり」の句は「高まどの尾上の櫻さきにけり」の句調なり。「おさん出て呼べ行きすぎぬまに」は「いざ見にゆかん散りすぎぬまに」の句調なり。これ景樹が豆腐屋の歌よむ時、此の歌の事を思ひ、其の句調を取りてよみたるにはあらず、景樹の腦中此の歌ありて、豆腐屋の聲をきくと其の儘、此の歌の句調、忽ち俗言をのせてすらくと口に出でたるまでにて、景樹自身に於いても、もとより此の歌の句調に因由せ

詠歌のみならず、詩人の詩を作り、文章家の文章を屬る、亦皆先達の句調語調に借るものなり。

し事は知らざりしなるべし。されど仔細に之れを分析すれば、全く高まどの歌の調に基きしものなり。さてこれは特に景樹のみならず、すべての詠歌亦皆先達の句調によらざるはなし。又ひとり詠歌のみならず、詩人の詩を作り、文章家の文章を屬る、亦皆先達の句調語調に借るものなり。されば先達が各種の詩歌文章を能くわが脳中に蓄藏するに於いては、其の詞藻、句調、體裁、皆我が材料となり、事に應じ、物に觸れ、忽ち我が思想を載せて、歌に、詩に、文章に現はれ出づべし。さるからに其の脳中の材料となり、思想を載する器となるものは、最も深く注意して選ばざるべからず。

『歌がたり』

二七 簑蟲に

落合直文

落合直文
國文學者
號は萩廼舍
仙臺の人
明治三十六年歿
年四十三

簑蟲にわれあらねども秋風になき父をのみ戀ひわたるかな

母の背にむかしながめしわが身とは知るや知らずや
ふるさとの月

世に媚びぬこゝろも見えてなかくに瘦せたる菊の
おもしろきかな

父君よ今朝はいかにと手をつきてとふ子を見れば死なれざりけり

父と母といづれかよきと子に問へば父よといひて母をかへりみぬ

緋緘の鎧をつけて太

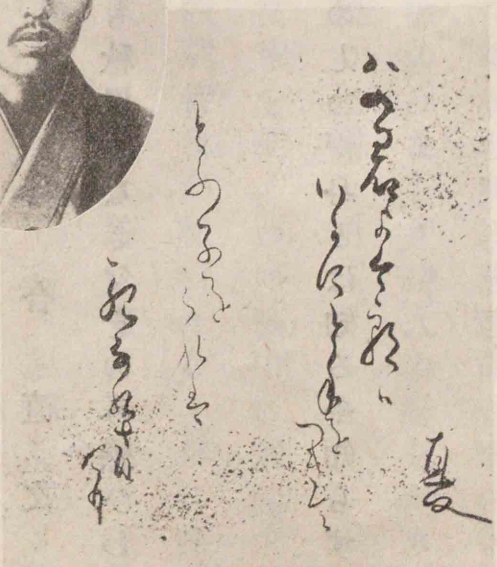
刀佩きて見ばやとぞ

思ふ山櫻花

霜やけの小

さき手して

蜜柑むくわ



蹟筆の其と文直合落

が子しのばゆ風の寒きに

片假名のかたなりながら文かきて子はおこせたり年のはじめに(安房にて)

わがおくる麻のさごろもぬぎすてはや身にまとへあやに錦に(天町桂月に)

二つなきものなりながら事しあれば千々に碎けて物をこそおもへ(心)

天町桂月
文章家
名は芳衛
高知縣の人
大正十四年歿
年五十七

二八 勞苦と快樂

憂き事のなほこの上につもれかし

かぎりある身の力ためさん

これは人間不屈の勇氣を具象した壯快無比の作として、久しく人口に膾炙した古歌であるが、これを口ずさめば、大抵の人間は愚圖々々して居られなくなるであらう。さうして自分の過去を振返つて、恥かしさに堪へぬ氣持がして來るであらう。そして又憂き事苦しき事に一種の樂しみと勵みとを見出だすやうにもなるであらう。

昔から世に優れた人は、いづれも仕事をすることに無限の喜びを感じ、勞苦そのものに此の上なき幸福を感じた人であつた。

Chastone

(1809—1894)

第十九世紀に於ける英國の大政治家

凡そ仕事と名のつく以上は、どんな仕事でも必ず苦しみの伴ふものである。成功の祕訣は此の事實を覺悟して、仕事其の物に眞の興味を見出だし、勞苦其の物に眞の愉快を覺えるにある。昔から世に優れた人は、いづれも仕事をする事に無限の喜びを感じ、勞苦その物に此の上なき幸福を感じた人であつた。グラッドストーンは九十歳近くになつて、私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣をつけたが、この勤勉の習慣をつけたといふ其の事が、勤勉に對する立派な報酬であつた。若い人は、多く休息といふ事をば努力を中止するといふ意義に解釋するやうであるが、私は眞の休息は一つの努力から他の努力に

偉大なる人々は決して餘生を安樂に送るために勉強するものではない。彼等は勉強することに快樂を感じるのて、従つて死ぬまで最大の努力を續けようとする。

Edison

(1847—1931)

米國の電氣學者發明家

移る事だと思ふ。」と云つて居るが、誠に尊い教訓である。偉大なる人々は、決して餘生を安樂に送るために勉強するものではない。彼等は勉強することに快樂を感じるのて、従つて死ぬるまで最大の努力を續けようとする。エヂソン翁は、「私は、一つの發明を完成すれば、もうその發明に用がない。多くの人は、發明から來る収入を、努力に對する報酬のやうに考へるかも知れぬが、私自身は少なくともさうは思はぬ。私の最大の喜びは、努力して仕事をするこゝである。」といったといふが、之れを考へて見ても、偉人の精神の据ゑどころを知ることが出来るであらう。

偉人天才といはれる人には、生れつきよりも寧ろ勤勉に

偉人天才といはれる人には、生れつきよりも寧ろ勤勉によつて才能を發揮したものが、多い。

Santi Raphael

(1483—1520)

文藝復興期のイタリーの畫家

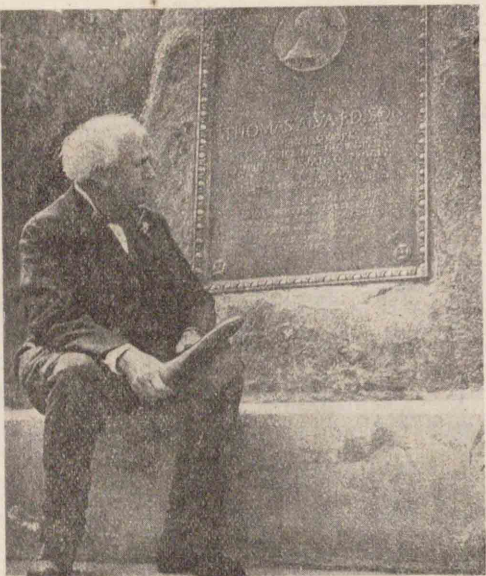
Bonarrote

Michelangelo

(1475—1564)

文藝復興期のイタリーの畫家

詩人、彫刻家、建築家。



エヂソンの記念碑

五百以上の素描とを殘した。

ある人がラファエルに向つ

よつて才能を發揮したものが、多い。如何によい素質を持つて居ても、捨て、置いて、光る道理がない譯である。有名な畫家ラファエルを、ミケランジェロが批評して、「彼れの偉

大は、彼れの天才よりも寧ろ彼れの勤勉に負ふ所が多かつた。」といったのは至言である。ラファエルは僅かに三十七歳で歿なつたが、それにも拘はらず、實に二百八十七枚の繪と

Jean François Millet
(1814—1875)
フランスの畫家
好んで農民を畫
き、文藝味宗教
味に富んだ點で
名高い。

て、「どうしてこんな偉大な仕事が出来ましたか。」と尋ねたら、
彼れはやさしい聲で、「私は小さい時分から何事をも好い加
減にしなかつたのです。」と答へたといふことである。フラ
ンスの有名な畫家ミレーも、「私は凡ての少年に向つて、たゞ
働けと忠告するだけである。皆が皆、天才になることは不
可能であるかも知れぬが、皆が皆仕事をすることは可能で
ある。どんな天才でも仕事をしなければ何にもならぬ。」と
云て居る。

人といふものは、とかく他人の仕事を羨ましがるもので
ある。それは、どんな仕事でも、表面は樂なやうに見えるか
らで、従つて他人のやつてゐる仕事に携はつて見ると、始め

Horace Mann
(1796—1859)
米國の教育家

どんな職業に従
事して居ても、
その職業は決し
て人間の品性を
左右するもので
はない。それに
従事する人の心
の如何によつ
て、その職業が

てその苦しさがわかつて、自分のもとの仕事が戀しくなつ
て來るものである。若し凡ての人が、仕事をする事その事
に快樂を感じるならば、仕事の種類は問題でなくなるであ
らう。だからホレース、マンも「自分の現在の仕事を嫌つて
他の仕事に移る人の氣が知れない。私に取つては仕事す
る事その事が、魚の水に於けるやうな關係になつて居る。」と
言つて居る。

どんな職業に従事して居ても、その職業は決して人間の
品性を左右するものではない。それに従事する人の心の
如何によつて、その職業が卑しくもなり、又尊くもなるので
ある。また職業のために手や足を汚染することは、決して

卑しくもなり、又尊くもなるのである。

Solomon
(1000B.C.頃)
ヘブライの王
ソロモンの箴言
舊約聖書中に收めらる。

その心を汚染するのではなくして、寧ろその心を清淨ならしめるのであるといつてもよい。外見の穢い職業に孜孜として働いて居る人の姿を見れば、崇高な感じこそすれ、穢いといふ感じは毛頭もしないものである。だからソロモンの箴言にも、「汝かの事務に勤勉なる人を見ずや、彼れは國王の前に立つことを得べし。」とあつて、如何に勤勉の尊いかを教へて居る。

John Tyler
(1790—1862)
アメリカ合衆國
の第十代の大統領

アメリカ合衆國の大統領タイラーが、任期が満ちて退職すると、間もなく、其の政敵は彼れを翻弄するつもりで、彼れを其の居村の測量師に選んだ。タイラーは、いやがるかと思ひの外、喜んでその職を引き受け、しかも一所懸命にその

仕事に従つた。これにはさすがの政敵等も降参して、もういゝ加減に辭職してはいかゞですかといふと、タイラーは平然として、「私はどんな仕事でも引受けるが、一旦引受けた以上、決して辭職は致しません。」と返答したといふことである。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危険から遠ざからしめるものである。「小人閑居して不善をなす。」と古言にも云つて居るが、小人に限らず、凡人間といふものは、ぼんやりして居る時に、碌な事を考へるものでない。犯罪學上の統計を見ても、倦怠即ちフランス語の謂はゆるアンニユイが、各種の犯罪の極めて重大な原

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危険から遠ざからしめるものである。

困となつて居るのである。オーウン、フェタムは「事務の中に生長しない者は最も下劣な人間だ」といつて居るが、私はむしろ「仕事をしないものは最も危険な人間だ」と言ひたいと思ふのである。

何事をするにも、人はとにかく仕事を早く仕遂げたいと希望するものである。いはゞ成功を急ぐのであるが、これも畢竟ずるに、勤勉勞苦そのものに快樂を發見し得ないため、眞に勤勉なる人は、一面からいふと頗る氣の長いものである。ダーウインは蚯蚓の研究に對して實に前後三十年を費して居る。文豪ゴールドスマスは一日に四行づつ書けば十分だと云つて、名高い^{ザ、デューランド、ウイレー}「荒村行」を書くのに前後七年

Charles Robert Darwin (1809—1882) 英國の博物學者 生物進化論の創唱者
The Deserted Village

Oliver Goldsmith (1728—1774) 愛蘭土の詩人 歴史家、小説家

Edward Gibbon (1737—1794) 英國の歴史家

人間は如何に努力勉強しても、若し勞苦そのものに快樂を覺え

を費した。而も彼れはその四行を書くのに、一日かゝつて、ウン／＼云つて苦しんだと云ふことである。

急がずは濡れざらましを旅人の

あとより晴るゝ野路の村雨

といふ歌もある通り、成功を急ぐのは、決して成功をもたらず所以ではない。有名な「ローマ衰亡史」を書いたギボンはその第一章を三度書き直して始めて満足したといはれて居るが、全篇を完成するのに、實に二十五年の歳月を費したのである。

人間は如何に努力勉強しても、若し勞苦そのものに快樂を覺えるならば、決して過勞といふ現象の生ずるものでは

るならば、決して過勞といふ現象の生ずるものではない。

Henry Morton Stanley
(1841—1904)
アフリカ探検家

ない。過勞といふ現象の生ずるのは、成功を急ぐか、又は勤勉勞苦に興味を持たぬからである。それゆゑスタンレー卿も「どんなに激しい仕事をして、確乎して規則正しく進んで行くなれば、決して身體を害するものではない。」と云つて居る。實際若し過勞のために病氣になつた人があるならば、それはその人が仕事に對する興味を少しも持たなかつた證據だと云つてよいであらう。

〔小酒井光次の文に據る〕

二九 無名の指

鳩翁 道話

孟子曰、今有無

小酒井光次
醫學博士
文學者
不木と號す
名古屋の人
昭和四年歿
年四十

孟子曰はく、「今無名の指あり、屈して信びず。疾痛事に害

名之指、屈而不信。非疾痛害事也。如有能信之者、則不遠、晉楚之路。爲指之不若人也。指不若人、則知惡之。心不若人、則不知惡。此之謂不類也。

仁、人心也

學問之道、無他、求其放心而已矣。

あるに非ざるなり。如し能く之れを信ぶる者あらば、則ち晉楚の路を遠しとせじ、指の人に若かざるがためなり。指人に若かざれば、則ち之れを惡む事を知る。心人に若かざれば、則ち惡む事を知らず。此れを之れ類を知らずと謂ふなり。扱これは前晚辯じました「仁は人の心なり」の次ぎの章でござります。即ち學問の道、他無し、其の放心を求むるのみ」といふ言によつて、孟子がまた譬を引いて、人の心の大切な事を御示しなされたのでござります。今とは今ここに申すことぢや。無名の指とは小指の隣の指でござります。其の外の指は、親ゆびを大指といひ、人さしゆびを頭指といひ、高々ゆびを中指といひ、小ゆびを小指と申しま

す。たゞ小指の隣のゆびに名が無い。そこで名の無いが名となりまして、無名の指と申します。何ゆゑまた名がないぞといふに、とんと用のない指ぢや。物を握るは親ゆび小ゆびの力、つむりをかくは人さし指、酒のかんを試みるは小指の役、皆それ／＼に用があれば、無名の指ばかりは無用の指、有つて邪魔にはなりません。無くては事も事はかけませぬ。一身のうちにて最も軽いものぢや。其の指が屈んでのびぬ。勿論痛みもかゆみもない。故に疾痛事に害あらずと申してある。畢竟無くても苦しからぬ指なれば、曲つてあつても痛みさへなくば、捨てゝおいてよい筈なれども、もしこれをよく伸ばしてくれる醫者どのがあると聞い

羞惡之心、義之端也。
（孟子の語）

たら、道の遠いもいとはず、定めて療治を受けにゆくであらう。それは何ゆゑ、指が世間の人と少し違つてあるゆゑ、恥かしうおぼえて、療治を受けまするのぢや。そこで指の人に若かざるがためなりと申してござります。成程よう人は恥を知つたものぢや。其の筈でござります。羞惡の心は義の端なり」と申して、恥を知るが人の生れつき、しかしながら其の恥を知るに二様ござりまして、姿の恥を知つて、心の恥を知らぬ人がござります。是れはきつい御了簡ちがひぢや。心ほど大切なものはござりませぬ。心は身の主と申して、一軒の内では旦那殿と同じことぢや。その旦那殿の心が煩ひ苦しんでゐるを捨て置いて、家來の

指不^レ若^カ人知^ム
惡^ム之^ノ心不^レ
若^ク人^ニ則^シ不^レ知^ル
惡^ム此^ノ之^ノ謂^フ不^レ
知^ル類^ノ

からだばかり可愛がり、膝頭すりむいた、ほくちを付けい。「灸がいぼうた、膏藥はれ。」風ひいた、葛根湯、根ぶか雑炊、生姜ざけ」と、かりそめにも身體の御世話はなされますれど、心の事は一切御かまひなしぢや。人に生れて人のやうな心ももたず、鬼のやうな心を持つたり、狐のやうな心を持つたり、蛇のやうな心を持つたり、鳥のやうな心を持つて、恥かしいとも思はず、からだばかり吟味してござるは、どういふ所から間違うて來たやら。此の間違は古うある事と見えて、指人に若かざれば、之れを惡むことを知る、心人に若かざれば、則ち惡むことを知らず、此れを之れ類を知らずと謂ふ」と、孟子も仰せられた。是れは重いと軽いとが分からぬのぢや。

燒物を引いてま
はると、はや目
の玉がきよろつ
き出し、

大を捨て、小を取ると申すものでござります。人情は一般小は嫌ひ、大はすき、輕いは嫌ひ、重いは好きぢや。そこで親類縁者へ招かれて、御馳走にあづかる時、本膳が出たあとから、燒物を引いてまはると、はや目の玉がきよろつき出し、向う三軒兩隣をにらみ廻し、わが燒物と見くらべて、隣の燒物が五六分ほど大きいと、肝癢が胸につツぱり、「これの亭主は何と心得てゐるぞ。太郎兵衛も御客、おれもお客ぢや。なんでおれには小さい燒物をつけたのぢや。何ぞこれには意趣遺恨でもある事か」と、腹の中がねぢれ出す。能う思うて御らうじませ、燒物に何の遺恨があらう。是れほどの僅かな事でも、小を嫌ひ大を取る。それに何ぞや、指の曲つ

かたちこそ
古今集、雜部、
兼法師の作。

伊能忠敬
地理學者
天文學者
上總國武射郡小
堤村神保貞恆の
第三子
下總國香取郡佐
原町伊能氏を嗣
ぐ
文政四年歿
年七十七

たのを恥かしう覺えて、心の曲りは苦にならぬといふは、大
を捨て、小を取ると申すものぢや。さるによつて、孟子も
「此れを之れ類を知らずと謂ふ」と御叱りなされた。なんと
人は能ううろたへたものぢやござりませぬか。古歌に「か
たちこそ深山みやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなん。」
指や足にかゝはつた事ぢやござりませぬ。

三〇 伊能忠敬の晩學

幸田露伴

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして
家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人とな

幸田露伴
文學博士
名は成行
東京市の人
慶應三年生

一舉手一投足の
勞を惜しむ。



伊能忠敬肖像

り、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も
圓滿に、最も美はしく果たさんことを期しゐたりき。

およそ才氣ある者の常
として、己が欲せざる事に
は、一舉手一投足の勞をも
惜しみ、單に己が欲する事
にのみ身を委ねんとする
ものなり。されど己が欲

せざる事なりとも、苟も爲さざるべからざる事なる以上は、
甘んじてわが情を屈しわが氣を抑へて、之れを爲すべき道
理にして、かく爲すは、その人の、啻に才氣あるのみならず、ま

年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折る、恐れは免るべからず。

奇才を抱く。

市井の凡人に伍す。

只管その家業に丹誠す。

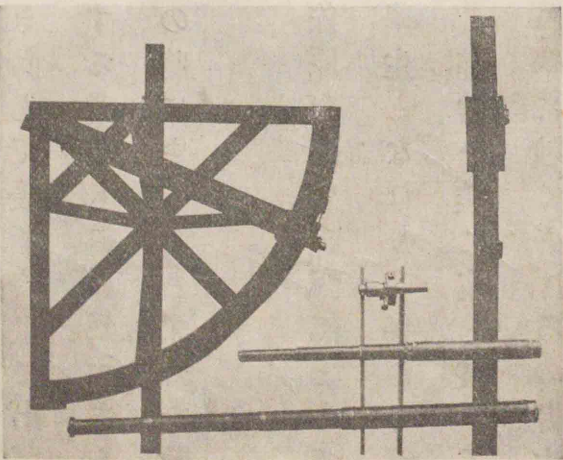
た實に徳量ある事を證するものといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少なし。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折る、恐れは免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡くしがたし。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且つこれをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く、只管その家業に丹誠したるは、實にその徳量の大きなるを見るべきものなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、是に於いて圓滿に果たされたり。

閑散の身となる。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身は、これより忠敬の自由に用ゐることを得べし。この時忠敬年すでに五十

歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。



伊能忠敬用のたぬ測量機

爲すある人には如何なる場合もわが力を試みるべき所なり。

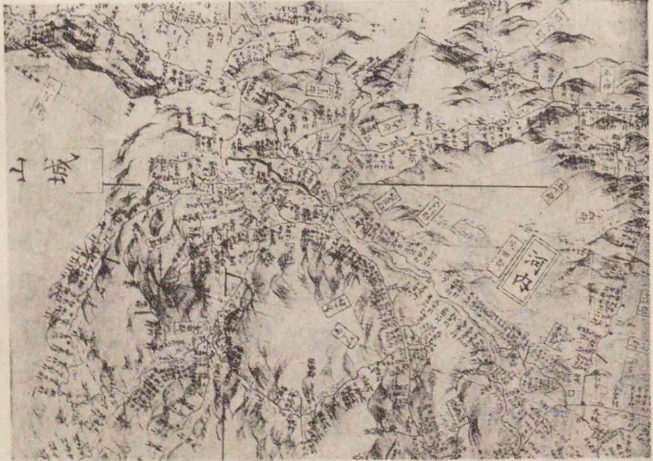
爲すある人には、如何なる場合もわが力を試みるべきところなり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當たつて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異なるところは、たゞその老いたると若きとのみ。かくし

笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就く。

高橋作左衛門
曆學家
號は東岡、梅軒
大阪の人
文化元年歿
年四十一

て忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから幕府には曆法改正の舉ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數、曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服し、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。



伊能忠敬實測圖

笑柄となす。

非凡の士。

空しく志を抱いて墓穴に入る。

普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業その人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、敢て頭を下げざるが習ひなれども、徳量ある忠敬は、いかにか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。忠敬は喜びて東岡の門下生となれり。同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實にいづれの世にありても、かゝる事實の存するがためなり。是を以て非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るなり。

蛙鳴蟬噪

忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めた

本來よりいへば、老いて學ぶは、たまくその志の淺からざるを顯はすのみ、また何の不可あらん。況んやまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に取りてはたゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしならん。されば忠敬と同門學生との優劣は、比較するまでもなく明らかになれり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進めぬ。かくして彼れは終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實に五十五

類齢用ゐるに堪へず。

喜色面に溢る。

勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず。

元氣勃勃として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏む。

歳の時なりき。五十五歳といへば、人は類齢用ゐるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色面に溢れ、即日にも出役せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當たりて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃勃として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによるなり。誰れか日本人を早熟の老人種なりといふ。是れ豈我れに伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。

〔伊能忠敬及び其の改修の文に據る〕

純正國語讀本 卷二終

昭和四年八月十七日發行
昭和四年六月十七日發行
昭和四年五月十七日發行
昭和四年四月十七日發行
昭和四年三月十七日發行
昭和四年二月十七日發行
昭和八年二月十七日發行

(新制版)

純正國語讀本 卷二

定價金 六十錢

編纂者 五十嵐 力

發行者 東京市澁橋區戸塚町一丁目五十八番地 早稻田大學出版部

印刷者 代表者 武田 尾吉
東京市牛込區榎町七番地 五十嵐 良晃

不	許
複	製

◆發行所 東京・早稻田 早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番

